

松山市保健センター南部分室・松山市南部児童センター整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

古 川 遺 跡

- 4 次調査 -

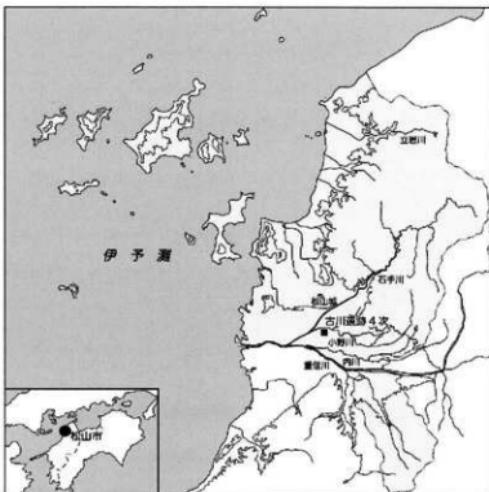
2010

松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

松山市保健センター南部分室・松山市南部児童センター整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

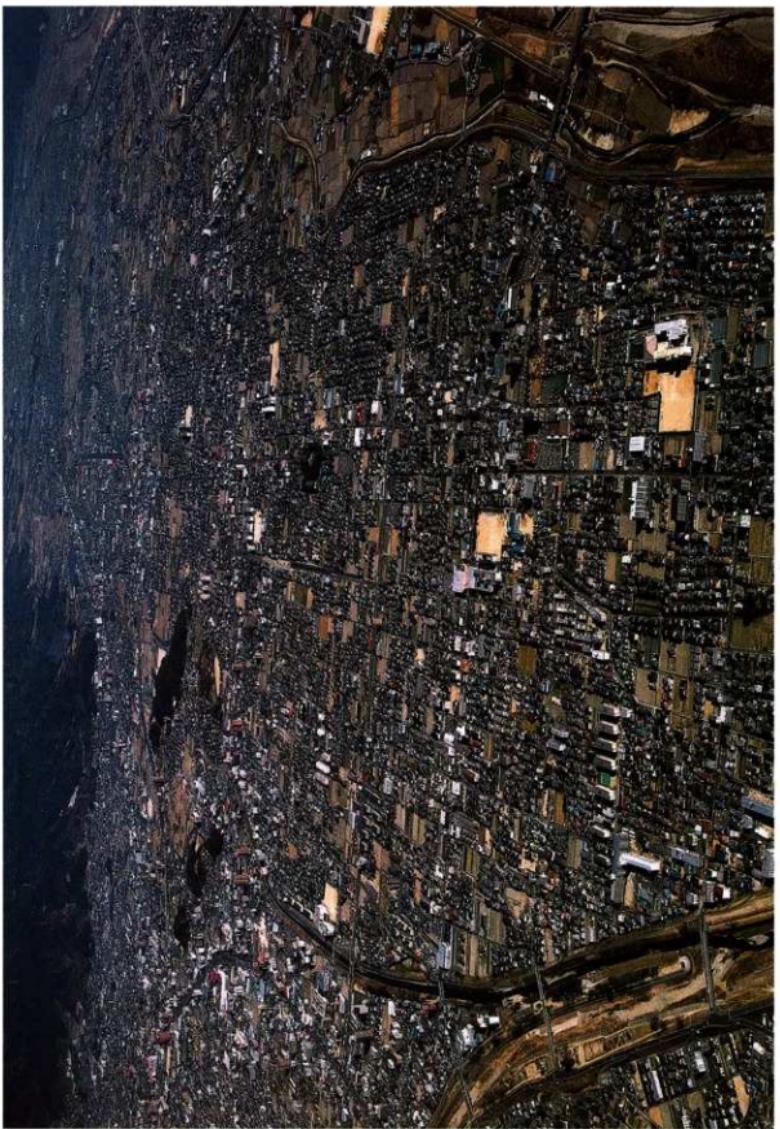
古川遺跡

- 4次調査 -



2010

松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター



卷頭図版 調査地遠景（西より）



序

本書で報告する古川遺跡4次調査は、公共施設整備に伴う調査です。これまで古川遺跡では、道路関連の整備に伴う発掘調査が行われ、弥生時代から中世の貴重な遺構・遺物が数多く見つかっています。古川遺跡の東側に位置する西石井遺跡でも多くの堅穴住居や溝、井戸などが見つかっており、両遺跡一帯に弥生時代から古墳時代の大きな集落が営まれていたことがわかつてきました。今回の調査地は、その集落の南西部に位置しています。

調査では、弥生時代から近世に至る遺構・遺物などが見つかりました。中でも弥生時代後期と古墳時代後期の溝が確認され、古川遺跡周辺の旧地形とかつての土地利用の一端をうかがい知ることができました。

このような成果を得ることができましたのも、調査にご協力いただきました各方面のご理解とご協力の賜であり、心より感謝申し上げます。本書が、埋蔵文化財の調査・研究の一助となり、文化財保護・教育文化の発展に寄与できることを願っております。

平成22年3月31日

財団法人松山市生涯学習振興財團
理事長 中村時広

例　言

1. 本報告書は、松山市古川北三丁目318番1の一部において松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センターが実施した古川遺跡4次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は、松山市保健福祉部子育て支援課により計画・実施された「松山市保健センター南部分室・松山市南部児童センター」建設に伴う事前調査として平成21（2009）年3月2日～平成21年5月31日までの間に実施された。
3. 本書で使用した標高数値は海拔標高を示し、方位は国土座標第IV系に基づく座標北（世界測地系）である。
4. 遺物の実測・製図、遺構図の製図等は、多知川富美子、木下奈緒美が行った。
5. 遺構の撮影は、大西朋子、武正良浩がを行い、遺物撮影・写真図版の作成は大西朋子が行った。
6. 遺構図・遺物図の縮尺は、縮分値をスケール下に記した。
7. 本書で使用した弥生土器の編年については『弥生土器の様式と編年・四国編』「伊予中部地域」梅木謙一 2000 を参考にした。
8. 遺構は以下の略号で記した。
溝：S D、自然流路：S R
9. 第3章自然科学分析は、バリノ・サーヴェイ株式会社に業務委託した。
10. 基準点の配置は国際航業株式会社に業務委託した。
11. 本報告にかかる遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターに保管されている。
12. 本報告の執筆・編集は、武正良浩が行った。証書は多知川、木下、高尾久子が行った。

本文目次

第1章 はじめに	
1. 調査に至る経緯	1
2. 刊行組織	1
3. 環境	
(1) 地理的環境	3
(2) 歴史的環境	3
第2章 調査の概要	
1. 試掘調査	7
2. 調査の経過	7
3. 層位	10
4. 遺構と遺物	15
第3章 自然科学分析	
はじめに	31
1. 試料	31
2. 分析方法	31
3. 結果	31
4. 考察	32
第4章 まとめ	38

挿図目次

第1図 調査地周辺の遺跡分布図	2
第2図 調査地と周辺の遺跡	4
第3図 調査区・試掘トレンチ位置図	8
第4図 遺構配置図	9
第5図 調査区北壁・南壁土層図	12
第6図 調査区東壁土層図	13
第7図 調査区西壁土層図	14
第8図 S R 1測量図	16
第9図 S R 1出土遺物実測図	17
第10図 S D 2測量図	18
第11図 S D 2出土遺物実測図(1)	19
第12図 S D 2出土遺物実測図(2)	20
第13図 S D 3測量図・出土遺物実測図	22
第14図 S D 4測量図	23
第15図 S D 4出土遺物実測図(1)	24
第16図 S D 4出土遺物実測図(2)	25

第 17 図 トレンチ出土遺物実測図	26
第 18 図 採集遺物実測図（1）	27
第 19 図 採集遺物実測図（2）	28
第 20 図 採集遺物実測図（3）	29
第 21 図 採集遺物実測図（4）	30

表 目 次

表 1 樹種同定結果	31
表 2 出土遺物観察表 土製品	39
表 3 出土遺物観察表 石製品	42
表 4 出土遺物観察表 木材	42

図 版 目 次

巻頭図版 調査地遠景（西より）

図版 1 自然科学分析 木材（1）	
図版 2 自然科学分析 木材（2）	
図版 3 自然科学分析 木材（3）	
図版 4 1. 調査前風景（南西より）	
2. 調査区南側客土除去状況（北より）	
図版 5 1. 調査区北側遺構検出状況（北より）	
2. S R 1 内遺物出土状況（北西より）	
図版 6 1. S R 1 完掘状況（北より）	
2. S D 2 完掘状況（北東より）	
図版 7 1. S D 4 内遺物出土状況（北西より）	
2. S D 4 内遺物出土状況（北より）	
図版 8 1. S D 4 完掘状況（北西より）	
2. 調査区北側完掘状況（北より）	
図版 9 1. 現地説明会風景（北より）	
2. 現在の状況（南西より）	
図版 10 ① S R 1 出土遺物	
② S R 1 出土遺物	
③ S D 2 出土遺物	
④ S D 4 出土遺物	
⑤ 客土内採集遺物（管玉）	
⑥ 客土内採集遺物（砥石）	
図版 11 客土内採集遺物	

第1章 はじめに

1. 調査に至る経緯

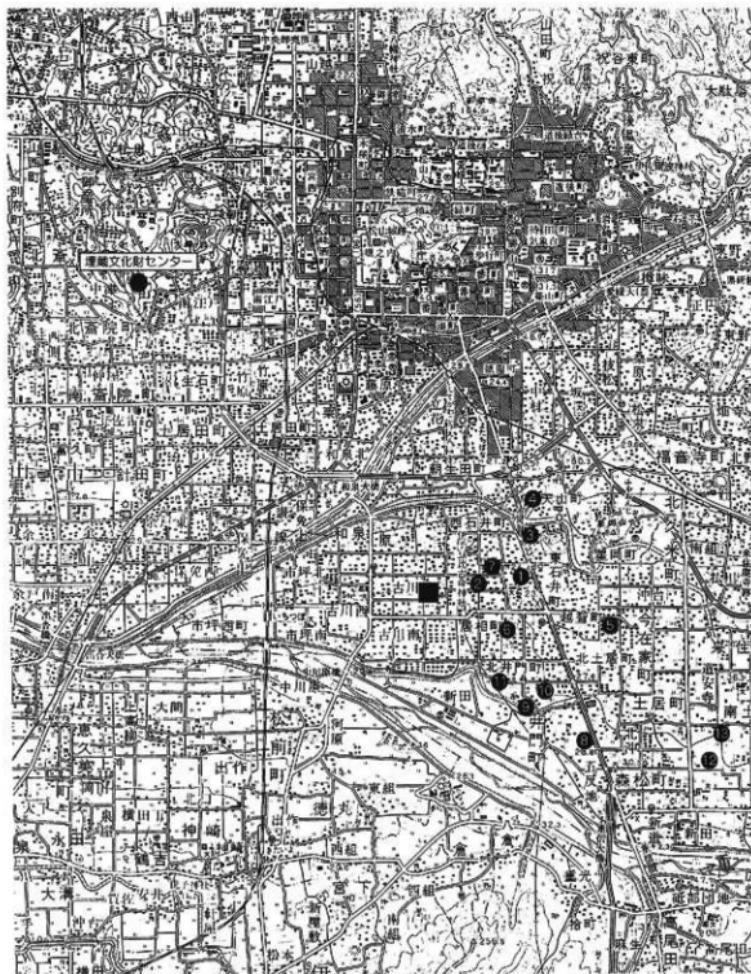
古川遺跡は松山平野南部、小野川と内川に挟まれた沖積低地に位置し、東方90mには松山市道千舟町古川線（通称、古川はなみずき通り）南北に延びる。平成14（2002）年の供用以降、沿道には飲食店、美容院等の各種商業施設が次々に建てられ、周囲に広がる田畠は急速にその姿を変えつつある。

平成19（2007）年5月18日、松山市保健福祉部子育て支援課（以下、子育て支援課）より、松山市古川北三丁目318番1、356番1、357番1（以下、申請地）における松山市保健センター南部分室・松山市南部児童センター整備工事にあたり、埋蔵文化財の確認調査申込書が、松山市教育委員会事務局文化財課（以下、文化財課）に提出された。申請地は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の範囲外である。最寄りの包蔵地は南東に位置する「Nal19 西石井遺物包含地」である。周辺では、西石井荒神堂遺跡1～3次調査、石井幼稚園遺跡1・2次調査、南中学校構内遺跡などの発掘調査が実施されている。調査地の東方では西石井遺跡1次調査が実施され、弥生時代から中世にかけての集落関連の遺構・遺物が多数確認されている。最寄りの遺跡としては、調査地の北側に近接する古川遺跡1～3次調査（松山市道北久米和泉線道路改良工事に伴う発掘調査、平成18年度実施）があげられ、古墳時代の溝や中世の土坑などが検出されている。

これらのことから、申請地における埋蔵文化財の有無を確認するため、平成20（2008）年3月12日～14日の間、文化財課の指導に基づき、財団法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター（以下、埋蔵文化財センター）が主体となり、確認調査を実施した。調査の結果、溝状遺構や柱穴のほか、弥生土器や土師器を含む遺物包含層が検出され、遺跡が遺存する可能性が高いと判断された。これらの結果を受け、子育て支援課と文化財課は協議を重ね、遺跡が確認された範囲について本調査が必要と判断した。本調査は文化財課の指導のもと埋蔵文化財センターが主体となり、子育て支援課の協力を得て2009（平成21）年3月2日から同年5月31日までの間に実施した。

2. 刊行組織（平成22年3月31日現在）

松山市教育委員会 事務局	教 育 長	山 内 泰
	局 長	藤 田 仁
企 画	官 古 錄 靖	茂
企 画	官 青 木 茂	
企 画	官 佐々木 乾	二
文化財課	課 長 家 久 則 雄	
	主 幹 森 正 純	
	副 主 幹 三 好 博 文	



■ 古川遺跡4次

- | | | | | |
|-------------|-----------|------------|------------|--------------|
| ① 東石井遺跡 | ② 西石井遺跡 | ③ 東山鹿ヶ森古墳群 | ④ 天山天王ヶ森遺跡 | ⑤ 石井東小学校校内遺跡 |
| ⑥ 南中学校構内遺跡 | ⑦ 石井幼稚園遺跡 | ⑧ 井門Ⅰ遺跡 | ⑨ 井門Ⅱ遺跡 | ⑩ 北井門遺跡1次 |
| ⑪ 北井門遺跡2・3次 | ⑫ 森松遺跡 | ⑬ 中の子廻寺 | | |

第1図 調査地周辺の遺跡分布図 (S=1:50,000)

財団法人松山市生涯学習振興財團	理事長	中村時広
埋蔵文化財センター	所長兼総務課長	松澤史夫
	次長	白石修一
	次長	折手均
	調査担当リーダー	重松佳久
	教育普及担当リーダー	栗田茂敏
	調査担当	梅木謙一
	大西朋子(写真担当)	武正良浩

調査地 松山市古川北三丁目318番1の一部

調査面積 594.925m²

調査期間 平成21(2009)年3月2日～同年5月31日

3. 環境

(1) 地理的環境

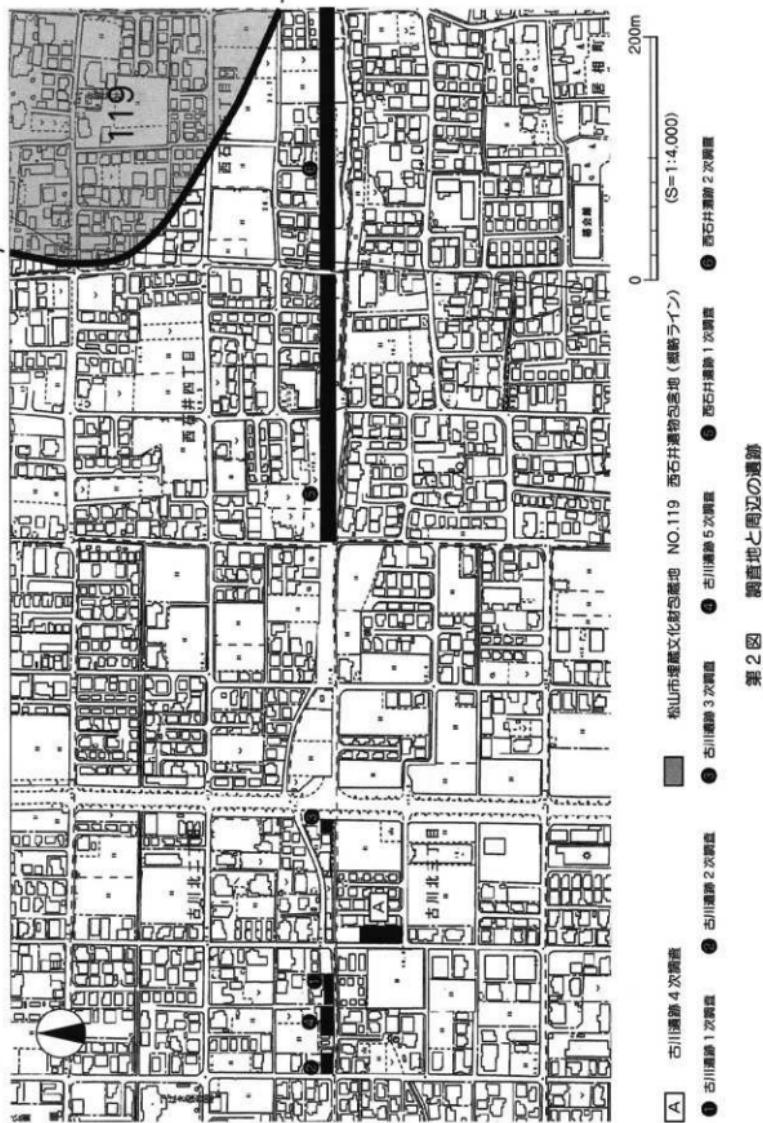
高縄半島南西隅に位置する松山平野は、四国愛媛県で最大の面積を持ち、西は瀬戸内海の伊予灘・斎灘に面し、南東部は西日本最高峰石鎚山系、北部は高縄山塊に囲まれた細長い三角州状の沖積低地帯である。その成り立ちは、主に一級河川である重信川とその支流である石手川や数多くの支流によって形成された扇状地、氾濫原、海岸部の海浜堆積物等で構成されている。調査地の所在する石井地区は、小野川・内川を含む重信川水系の堆積地で、和泉砂岩・結晶片岩系の砂礫層に覆われた扇状地及び扇状地性氾濫原である。重信川の一支部である内川は、東温市樋口の日吉谷に源を発し、松山市市坪南で重信川本流に合流する。石手川の支流である小野川は、小屋岸480mに源を発し、重信川と石手川の形成する三角形の中州のほぼ中央において南北に蛇行し、松山市保免上で石手川に合流する。蛇行部には左岸の「東山」、右岸東側の「星岡丘陵」、右岸西側の「天山丘陵」の三つの独立丘陵があり、「伊予三山」と呼称されている。

(2) 歴史的環境

本調査地周辺では、開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査が増え、数多くの遺跡が見つかっている。

先土器～縄文時代

松山平野内では、先土器時代から縄文時代中期までの遺跡は稀薄であるが、東石井遺跡2次調査の遺物包含層から縄文時代晚期中葉～後半の土器・石器が採取されている。石井地区北側には独立丘陵がある。丘陵上の東山鳶が森古墳群や天山天王ヶ森遺跡からはサヌカイト製のナイフ形石器が、それぞれ1点ずつ採集されている。また、南東約1.6kmに位置する井門II遺跡では縄文時代後期の土器が多数出土し、近接する北井門遺跡3次調査では縄文時代晚期の堅穴住居址が検出されている。



第2図 調査地と周辺の遺跡

弥生時代

前期の資料は、調査地南東部にある石井東小学校構内遺跡において土坑と土器棺墓が確認されている。土坑出土品や土器棺（壺棺）は前期前半の良好な資料である。また、調査地南東部にある南中学校構内遺跡からは、前期後半の土器が出土した溝が検出されている。溝出土品は、松山平野の前期後半の土器編年における基準資料である。古川遺跡2次調査では溝が確認されている。

中期の資料はなく、後期以降、遺跡の広がりが認められる。

後期の資料は、石井幼稚園遺跡2次調査において後期前半の土坑が確認されている。後期後半から終末では、石井東小学校構内遺跡より多数の竪穴住居址が検出されている。西石井遺跡4次調査では内部施設に周壁溝と炉をもつ竪穴住居址が確認されている。西石井荒神堂遺跡では竪穴住居址と土器棺墓（壺棺）が検出されている。西石井荒神堂遺跡3次調査では後期後葉に振られ、後期末に埋没したと考えられる区画溝が検出されている。東石井遺跡2次調査では後期終末に属する可能性が高い溝が検出されている。東石井遺跡3次調査では1つの遺構内から7個体分の高坏が出土した土坑が確認されている。近接する古川遺跡1次調査からは溝（後期）、土坑・土器棺（後期後半）、同遺跡3次調査では河川が検出されている。また、南東方の北井門遺跡1次調査において弥生時代後期から古墳時代の竪穴住居址が約200棟見つかっている。

古墳時代

前期の資料は、西石井遺跡4次調査において平面形態が方形を呈する竪穴住居址が確認されている。中期の資料は、石井幼稚園遺跡1次調査と同2次調査において竪穴住居址がそれぞれ1棟ずつ確認されている。東石井遺跡2次調査では中期末～後期に属する可能性が高い溝が検出されている。西石井荒神堂遺跡2次調査では中期から後期に属すると考えられる竪穴住居址、掘立柱建物址が多数検出されている。生産跡としては、南東方にある森松遺跡から中期の水田跡が検出されている。一方、古墳は石井東小学校構内遺跡において、周溝と思われる溝が検出されている。また、北井門遺跡1次調査では古墳時代前期の前方後方墳が検出されている。平野内においては数少ない沖積地上の古墳となり、平野における墳墓研究の一考となる好資料である。

古代～中世

古代において、石井地区は久米郡石井郷に属している。石井郷内には、調査地南東方に延喜式内社である「伊予豆比子命神社」（いよづひこのみことじんじゃ）が存在する。西石井荒神堂遺跡2次調査では6世紀末から7世紀初めと考えられ、井戸としての機能が想定される遺構が検出されている。石井幼稚園遺跡1次調査からは、平安時代の溝が検出されており、溝内からは大量の土師器、須恵器のほか、綠釉陶器や灰釉陶器が出土している。溝出土の土師器は、平野内における古代後半の土師器編年の基準資料になっている。古川遺跡1次調査では平安時代10～11世紀に比定される土坑が確認されている。石井幼稚園遺跡2次調査からは古代から中世の掘立柱建物址や中世の土坑、同1次調査からも中世の土坑が確認されている。西石井遺跡4次調査では柱穴から土師器の皿、壺が出土している。東石井遺跡3次調査では溝、柱穴等が確認されている。また、南東方にある中ノ子廃寺跡からは白鳳期の平隆寺式や法隆寺式系の軒丸瓦の系譜を持つ複弁八角蓮華文軒丸瓦や忍冬唐草文軒平瓦、均整唐草文軒平瓦が出土している。

近世

調査地及び周辺は内川と小野川の水利を多分に享受している地域である。内川の中流域は江戸中期から幕末にかけて、自然湧水による地下水の開発利用が進展した。寛延二（1749）年高井庄村屋相原経寿の開墾した野津（都）合泉、宝暦年間に開墾した大割泉、宝曆十（1760）年開墾の五反地泉、嘉永七（1854）年久米郡代官日下正倫によって開墾された日下泉、弘法大師ゆかりの杖の淵、立待泉など内川沿いのベルト状地帯には、自然湧泉が多い。小野川流域では和泉庄村屋森太郎左衛門勘が慶長十九（1664）年に完成した継淵堰から導水路を開拓して、和泉村70余町歩の良田化に成功した。

〔参考文献〕

- 森 光晴 1980 「浮穴・西石井荒神堂・東本Ⅰ・Ⅲ・桑原高井遺跡」松山市教育委員会
 松山市史編集委員会 1992「松山市史 第一巻 自然 原始 古代 中世」
 重松 佳久 1992「石手川水系に於ける旧石器文化Ⅱ桑原地区の遺跡」
 松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター
 栗田 茂敏 1994「石井幼稚園遺跡・南中学校構内遺跡 - 第2次調査 -」
 松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター
 松山市立石井北小学校 1997「ふるさと石井北」
 梅木 謙一 1998「石井東小学校構内遺跡」「石井・浮穴の遺跡」
 松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター
 中野良一・作田一精・多田仁・成田淳・伊藤嘉浩・白石将高・平岡孝司 1999
 「井門Ⅰ遺跡・井門Ⅱ遺跡」財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
 吉岡 和哉 2001「西石井荒神堂遺跡2次調査」「松山市埋蔵文化財調査年報13」
 河野 史知 2004「西石井荒神堂遺跡3次調査」「松山市埋蔵文化財調査年報16」
 吉岡 和哉 2005「東石井遺跡2次調査遺跡」「松山市埋蔵文化財調査年報17」
 高尾 和長 2006「東石井遺跡3次調査遺跡」「松山市埋蔵文化財調査年報18」
 宮内慎一・梅木謙一・木本完児・相原秀仁・大西朋子 2006「東石井遺跡・西石井遺跡-1・2・3次調査地-」
 松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター
 相原 秀仁 2007「古川遺跡」「松山市埋蔵文化財調査年報19」
 相原 秀仁 2007「古川遺跡2次調査」「松山市埋蔵文化財調査年報19」
 相原 秀仁 2007「古川遺跡3次調査」「松山市埋蔵文化財調査年報19」
 松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター
 高尾 和長・山之内志郎 2008「西石井遺跡4次調査」「松山市埋蔵文化財調査年報20」
 松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター
 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター 2009「北井門遺跡2・3次」現地説明会資料

第2章 調査の概要

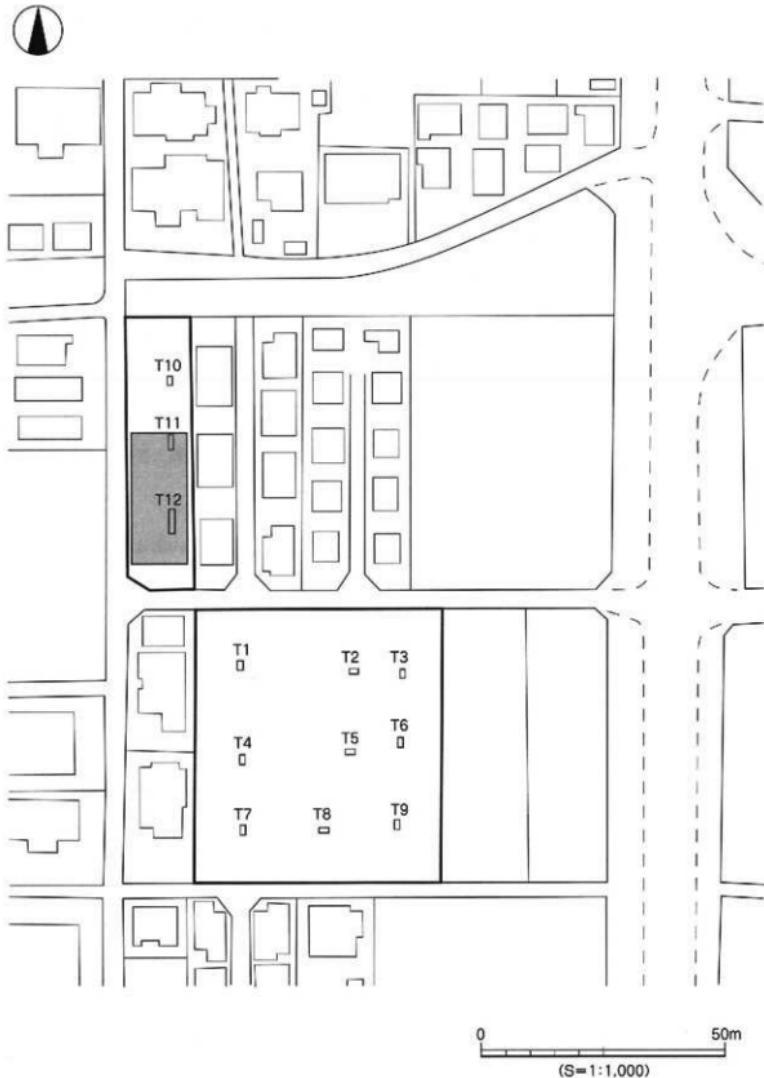
1. 試掘調査

試掘調査地は生活道路により2箇所に分かれており、申請地南側（市保健センター南部分室・市南部児童センター建設予定地）をA区、北側（両センター駐車場予定地）をB区として調査を行った。なお、A区には9本のトレンチ（T 1～9）、B区では3本のトレンチ（T 10～12）を設定し、土層観察と遺構・遺物の確認作業を実施した。その結果、A区では明確な遺構・遺物は検出されなかった。一方、B区の南側から溝状遺構や柱穴のほか、弥生土器や土師器を含む遺物包含層が検出され、遺跡が遺存する可能性が高いと判断された。試掘調査の結果を受け、駐車場予定地が本調査対象地となつた。調査面積は総面積3,665.21m²の内594.925m²である。

2. 調査の経過

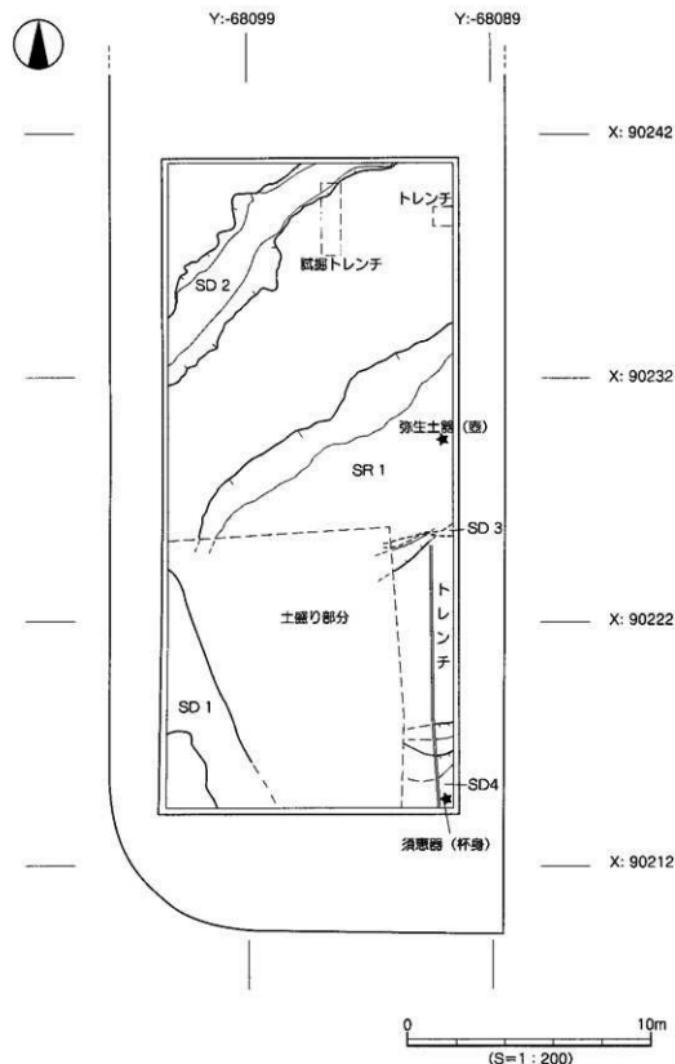
調査は3月2日～3月11日まで仮設事務所設置、調査地周辺整備、発掘機材搬入等の諸準備を行い、3月12日～5月30日まで野外調査を実施した。以下、調査工程を略記する。

- 3月12日(木) 重機により調査区南側の掘削を行う。手作業による調査区内簡易整備を行う。
- 3月17日(火) 委託業者による国土座標第IV系に基づく基準点測量杭を打設する。
- 3月18日(水) 重機により調査区南側に遺存する客土の掘り下げを行う。
- 3月19日(木) 松山市都市整備部公共建築課の指導により、調査区外側の安全柵を三角コーンから丸太杭、トラロープに変更する。
- 3月23日(月) 調査区南側、遺構検出作業。
- 3月27日(金) 調査区南側、高所作業車にて遺構検出状況写真撮影（大西朋子調査員）。
- 3月30日(月) S D 1の掘り下げ作業。
- 4月 7日(火) 埋文センター内の整理作業再開。
- 4月16日(木) 現場作業再開。以後、調査区南側の掘り下げ作業（客土除去）。
- 5月 1日(金) 調査区南側、高所作業車にて客土除去状況の写真撮影（大西調査員）。
- 5月 2日(土) 調査区南側、測量作業。
- 5月 7日(木) 調査区南側、重機による埋め戻し作業。
- 5月 8日(金)～12日(火) 調査区北側、重機による掘削作業。
- 5月13日(水) 調査区北側、遺構検出作業。午前中、埋文センター職員による現場検討会を開催する。
- 5月14日(木) 調査区北側、遺構検出状況写真撮影（大西調査員）。以後、遺構の掘り下げ。
- 5月23日(土) 10:00～11:30、現地説明会を開催。58名の市民の皆様に参加して頂いた。
- 5月28日(木) 調査区北側、高所作業車にて完掘状況写真撮影（大西調査員）。
- 5月29日(金) 調査区北側、重機による埋め戻し作業。



第3図 調査区・試掘トレンチ位置図

調査の概要



第4図 遺構配置図

5月30日(土) 発掘機材搬出作業。重機による埋め戻し作業終了。なお、当現場で設置した仮設事務所は、近隣において埋文センターが実施する他の発掘調査において使用するため、今回は撤去を行わなかった。

3. 層位

調査地は松山平野南部、小野川と内川とに挟まれた沖積低地に位置し、標高約15.5mに立地する。調査以前は耕作地であったが、調査直前は両センター建設現場から排出された土置き場や建設作業車の待機場所として利用されていた。調査地の基本層位は、第Ⅰ層：造成土、第Ⅱ層：耕作土、第Ⅲ層：近現代の客土、第Ⅳ層：黒色系粘土、第Ⅴ層：黒褐色粘質土、第Ⅵ層：暗灰黄色微砂層、第Ⅶ層：灰オリーブ色系土、第Ⅷ層：灰オリーブ色系微粒土、第Ⅸ層：緑灰色粘土である。

第Ⅰ層：工事に伴う造成土（真砂土・再生RCバラス）。3層に分かれる。層厚10～27cmを測る。

I-a : 造成土（客土・再生RCバラス）

I-b : 造成土（客土・真砂土）

I-c : 造成土（客土・耕作土+排土）

第Ⅱ層：現代の耕作土。調査区全域で見られ、4層に分けられる。層厚6～27cmを測る。

II-a : 5B 4/1 (暗青灰色土) [耕作土]

II-b : 5GY 5/1 (オリーブ灰色土) [耕作土、やや粘性を帯びる]

II-c : 2.5Y 6/2 (灰黄色粘質微砂) [床土]

II-d : 2.5Y 6/3 (にぶい黄色微砂) [床土]

第Ⅲ層：耕作地を水平に保つために搬入された近現代の客土で2つに分けられる。調査区南側に遺存し、層厚10～32cmを測る。層中からは多量の弥生土器片・土師器片と少量の陶磁器片・瓦片（近現代）が出土した。

III-a : 2.5Y 7/3 (浅黄色粘質微砂)

III-b : 2.5Y 3/1 (黒褐色粘質土) [灰黄色混、2～4cm丸礫混]

第Ⅳ層：にぶい黄褐色或いは黒色を呈する粘土層で調査区全域に堆積する。5層に細分され、層厚5～45cmを測る。

IV-a : 10YR 5/4 (にぶい黄褐色粘土) [強粘性]

IV-b : 5Y 2/1 (黒色粘土) [強粘性]

IV-c : 5Y 2/1 (黒色粘土、強粘性) + 2.5Y 5/3 (黄褐色粘質土、丸状のブロック混)

IV-d : 10YR 5/4 (にぶい黄褐色粘土) [強粘性] + SR1 塗土が斑に混じる

IV-e : 5Y 2/1 (黒色粘土、強粘性) [砂粒が混じる]

第V層：黒褐色粘質土で調査区北側に堆積する。層厚6～14cmを測る。

: 2.5Y 3/2 (黒褐色粘質土)

第VI層：暗灰黄色微砂層で調査区ほぼ全域に堆積する。層厚5～15cmを測る。

: 2.5Y 5/2 (暗灰黄色微砂層) [低い粘性]

第VII層：調査区北側に堆積し、オリーブ黄色微砂層と灰色微粒土の二つに分層される。層厚5～26cmを測る。

VII-a : 5Y 6/3 (オリーブ黄色微砂層) [乾くと硬性] 北壁

VII-b : 7.5Y 4/1 (灰色粘質土) 北壁

第Ⅶ層：灰オリーブ色を呈する微粒土層で四つに分層される。層厚 10 ~ 50cm を測る。

-VII-a : 5Y 5/2 (灰オリーブ色粘質微粒上) [5Y 6/1 灰色が斑に混じる]

-VII-b : 7.5Y 4/1 (灰色微粒層)

-VII-c : 5Y 5/3 (灰オリーブ色微砂層)

-VII-b : 2.5GY 4/1 (暗オリーブ灰色粘質微粒層)

第Ⅷ層：緑灰色粘土で調査区南側に堆積する。層厚 10 ~ 27cm を測る。

: 10GY 6/1 (緑灰色粘土) [強粘性]

間層 間層 a : 2.5Y 3/2 (黒褐色粘質上) [砂粒混、一部砂質系] 北壁

間層 b : 7.5Y 5/3 (灰オリーブ色砂礫層) [3 ~ 5cm 大の丸礫多混] 北壁

間層 c : 2.5Y 6/3 (にぶい黄色粗砂層)

遺構埋土

S R 1 : 2.5Y 4/1 (黄灰色粘土) [強粘性 2.5Y 5/6 黄褐色が筋状に混じる]

S D 2 -① : 10YR 3/1 (黒褐色粘土) [粘性やや強い]

-② : 2.5Y 3/1 (黒褐色砂礫層) [5 ~ 25mm 程度の丸礫多混]

-③ : 5Y 3/2 (オリーブ黒色微砂層) [やや粘性を帯びる]

S D 3 -① : 10YR 2/2 (黒褐色粘土)

-② : 10YR 2/2 (黒褐色粘土) [微砂が少々混じる]

S D 4 -① : 7.5YR 3/2 (黒褐色粘質土)

-② : 5YR 4/1 (褐灰色砂質土) [やや粘性を帯びる]

-③ : 2.5Y 5/4 (黄褐色粗砂層)

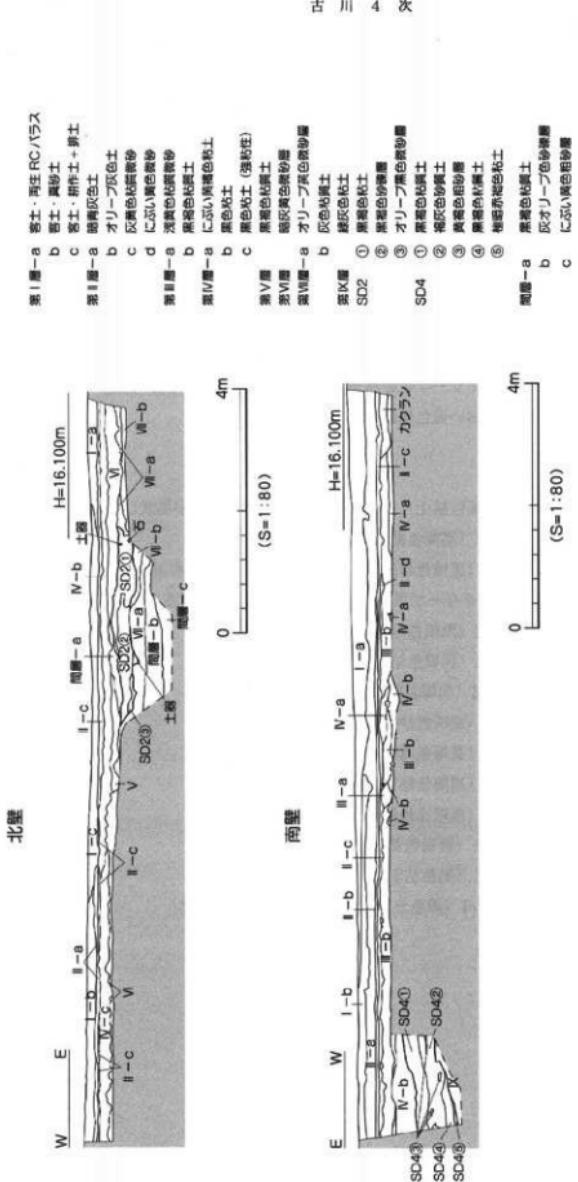
-④ : 5YR 3/1 (黒褐色粘質土) [粘性強い]

-⑤ : 5YR 2/3 (極暗赤褐色粘土)

-⑥ : 7.5YR 3/1 (黒褐色粘土)

-⑦ : 7.5YR 2/1 (黑色粘土)

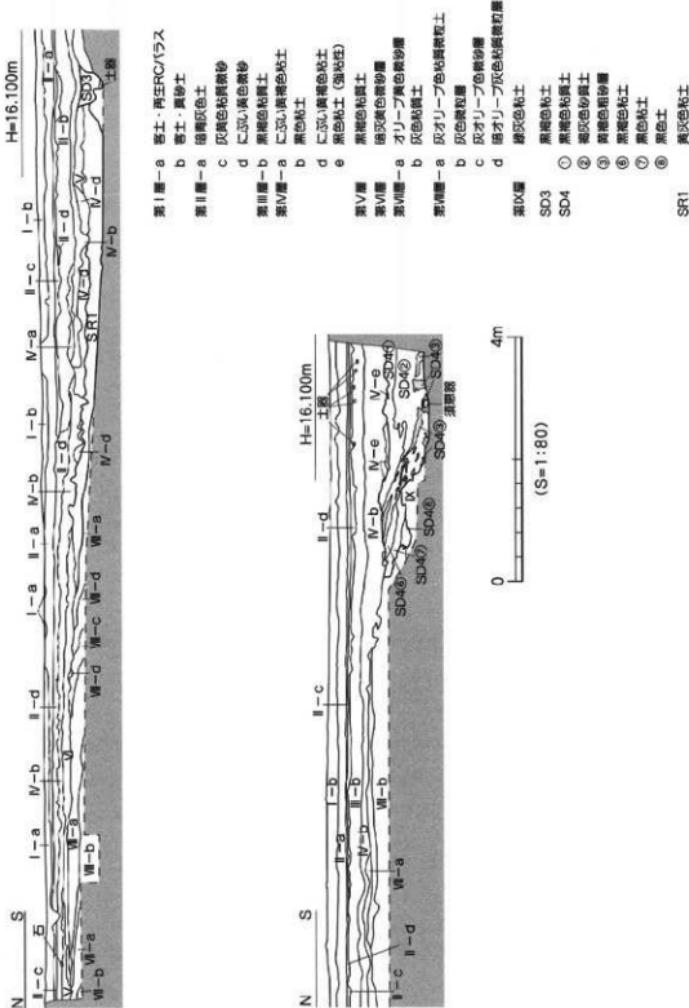
-⑧ : 7.5YR 1.7/1 (黑色土) [締まりのないフサフサ感]



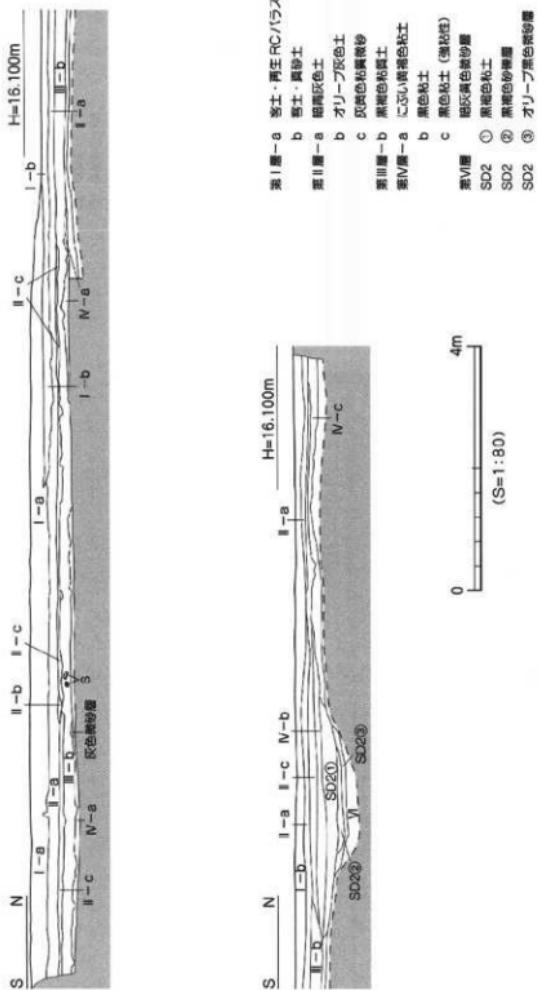
調査区北壁・南壁土層図

第5図

調査の概要



第6回 調査区東壁土層図



第7図 朝倉区西壁土層図

4. 遺構と遺物

本調査で検出した遺構は自然流路1条（SR1）、溝3条である。また、第Ⅶ層中から弥生土器が出土した。なお、SD1は客土中から検出された。詳細は省略する。

SR1（第8図）

調査区中央部で検出した。検出規模は長さ13.6m、幅6.5m、深さ35cmを測る。主な埋土は黄灰色粘土（2.5Y 4/1）で強い粘性を帯び、黄褐色（2.5Y 5/6）が筋状に混じる。遺物は弥生土器、木片が出土している。

出土遺物（第9図）

1は外傾し、直線的に立ち上がる壺形土器の体部片。外面は丁寧なナデ調整が施される。2はやや外反し、立ち上がる壺形土器の口縁部片。頭部付近に1条の明瞭な沈線が施される。外面にはハケ日調整痕が残る。3は残存長28cm、径3cmを測る棒状の芯持ち材。全体に焦げ跡が残る。樹種はコナラ属アカガシ亜属。

時期 出土遺物は弥生時代後期後半と考える。

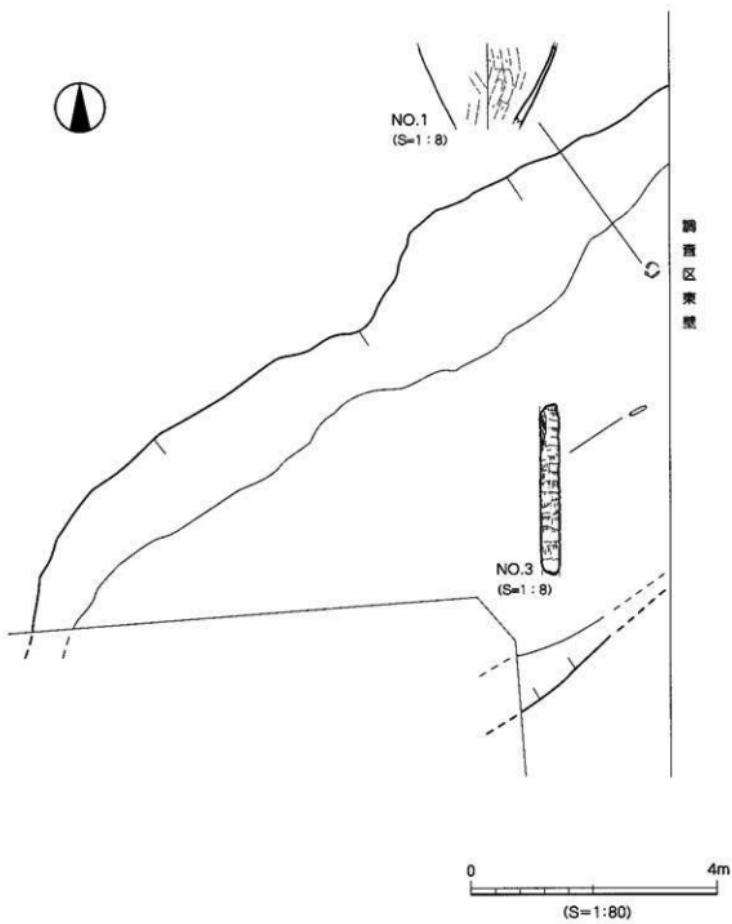
SD2（第10図）

調査区北側で検出した。検出規模は長さ10.4m、幅3m、深さ35cmを測る。主な埋土は上から黒褐色粘土（10YR 3/1）、黒褐色砂礫層（2.5Y 3/1）、オリーブ黒色微砂層（5Y 3/2）である。砂礫層には5～25mm程度の丸砾が多く含まれ、下層はやや粘性を帯びる。遺物は弥生土器、土師器、木片、種子が出土している。

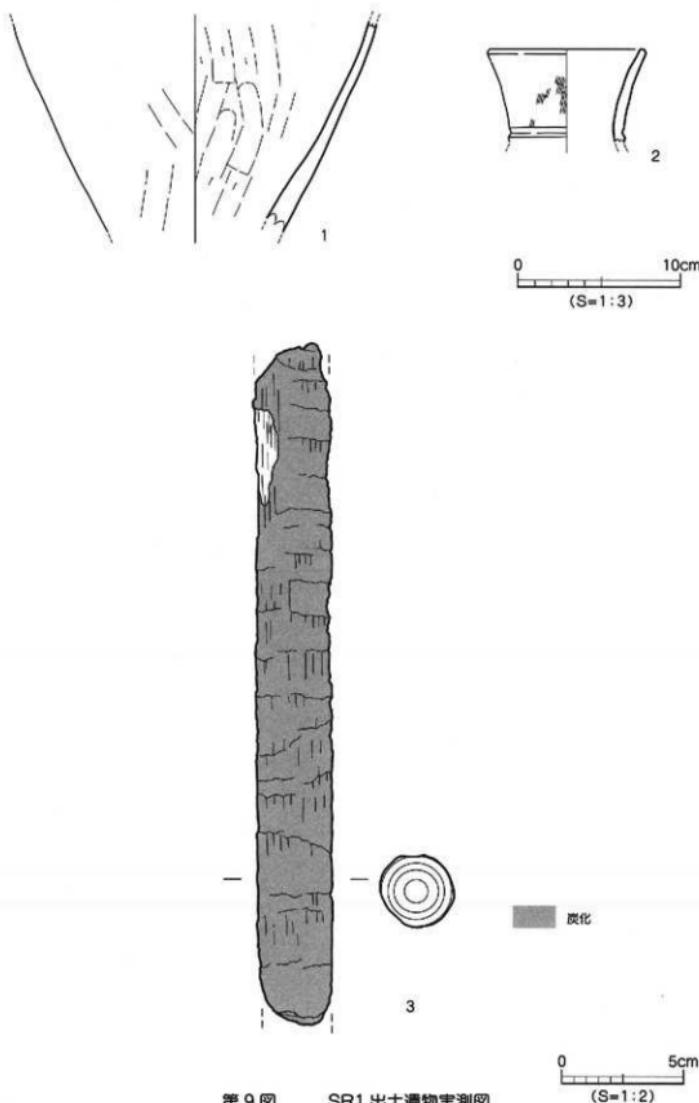
出土遺物（第11・12図）

4は「く」の字状に屈曲する壺形土器の口縁部。端部はやや細く仕上げられる。5～9は壺形土器。5は面をなす口唇端面に刻み目が施される。6・7は複合口縁壺の拡張部片。6は外面に円形浮文が貼付される。端部は細く仕上げられる。7は「く」の字状の屈曲外面端部に刻み目が施される。8は外反する頭部片。頭部と口縁部の境目は稜をなす。9の口縁端面は撫でにより拡張され、中央は僅かに凹む。10～12は鉢形土器。10の口縁端面は撫でにより拡張され、中央は僅かに凹む。11の口縁部は短く緩やかに外反する。外面にハケ目調整痕が残る。12は口縁部の屈曲内側がやや肥厚される。13～16は底部片。13はやや広めの平底を呈する。14の体部は底部から僅かに段をなし、やや内反的に立ち上がる。15は狭小な底部を残す。16の体部は緩やかに外反して立ち上がる。17は高壇の壠柱部片。18は支脚の上部片。面をなす口唇部には明瞭な刻み目が施される。内側には指頭圧痕を看取。19は板状の木片。樹種はヒノキ科。

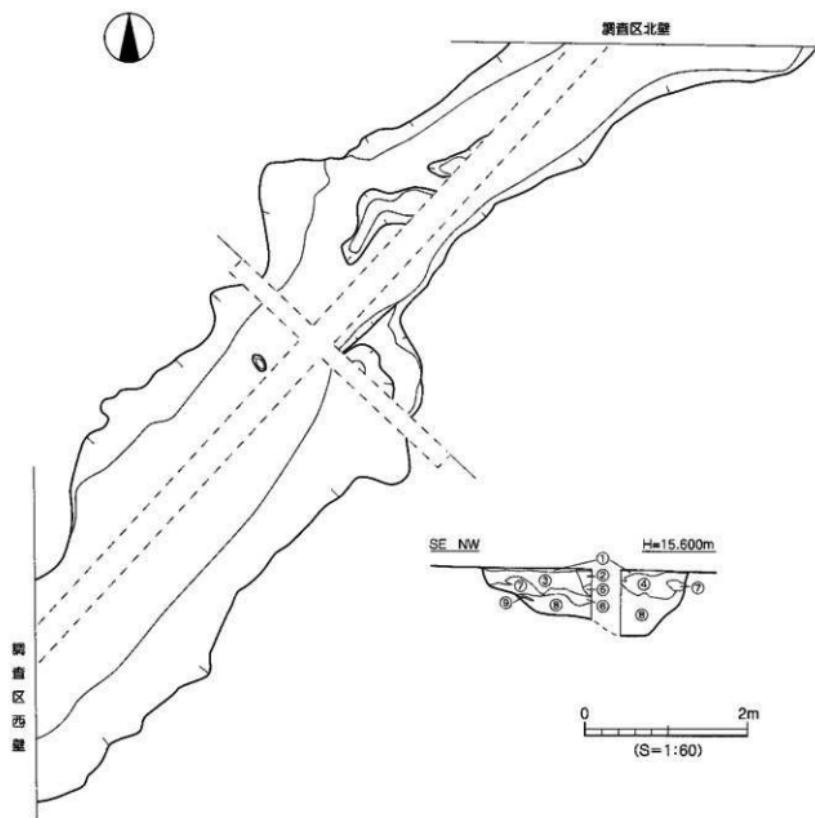
時期 出土遺物は弥生時代後期後半と考える。



第8図 SR1測量図

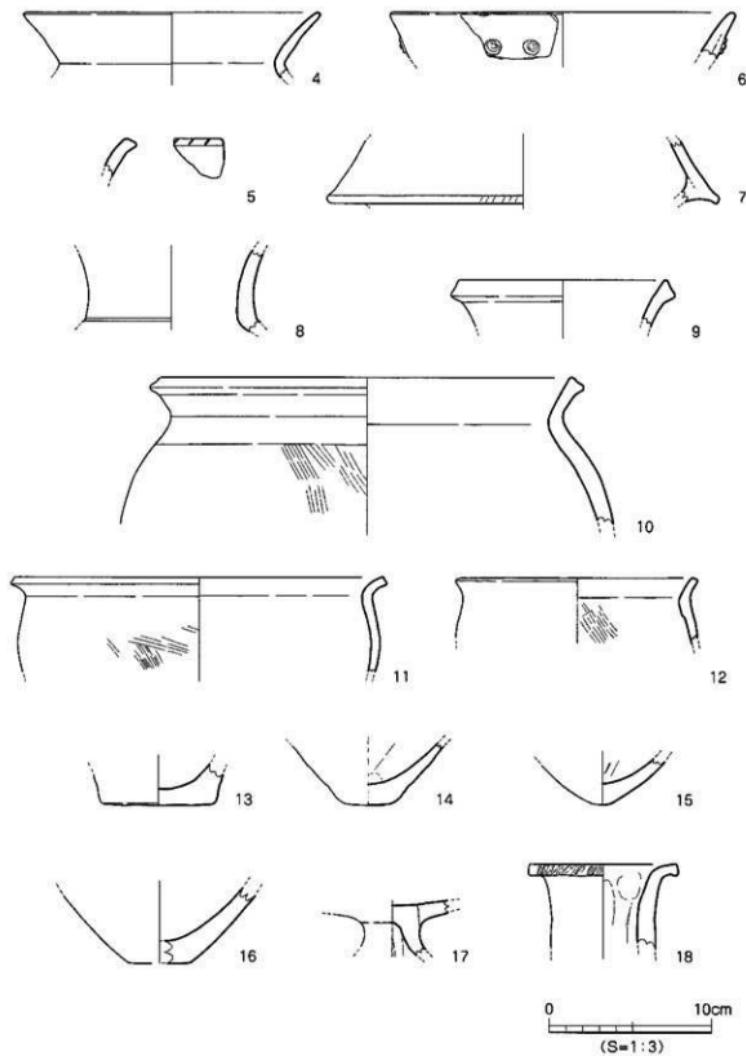


第9図 SR1 出土遺物実測図

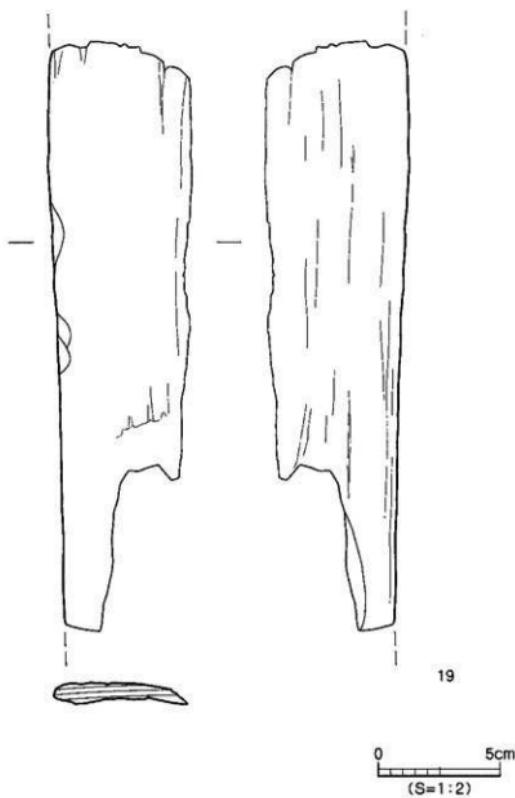


- | | |
|--------------------------------|-------------------|
| ① 黒色粘土（強粘性）5Y2/1 | ⑥ オリーブ黒色微砂層 5Y3/2 |
| ② 黒褐色砂層 10YR3/1 | ⑦ オリーブ黄色微砂層 5Y6/3 |
| ③ 黒褐色粘土（粘性やや強い）10YR3/1 | ⑧ 灰色粘質土 7.5Y4/1 |
| ④ 黑褐色粘土 10YR3/1+(浅黄色粘質土 5Y7/4) | ⑨ オリーブ黒色粘質土 5Y3/1 |
| ⑤ 黑褐色砂礫層 2.5Y3/1 | |

第10図 SD2測量図



第11図 SD2 出土遺物実測図 (1)



第12図 SD2出土遺物実測図(2)

S D 3 (第13図)

調査区中央部、東壁付近で検出した。検出規模は長さ2.7m、幅57cm、深さ25cmを測り、東から西に掘削された溝。埋土は黒褐色粘土(10YR 2/2)で下方には微砂が少々混じる。遺物は溝底付近から弥生土器の小片、木片が出土している。

出土遺物 (第13図)

20は、長さ34.6cm、幅5cm、厚さ0.8cmを測る板材。中央部に厚さが同程度の小片が付着していた。樹種はヒノキ。なお、土器の小片は図化出来なかった。

時期 遺構埋土がS D 2と似ていることと出土遺物から概ね弥生時代後期と考える。

S D 4 (第14図)

調査区南側で検出した。検出規模は長さ3.5m、幅3.9m、深さ56cmを測り、東西方向に掘削された溝で、溝下位には粗い砂が堆積している。埋土は8層に細分され、主に黒褐色を基調とし、粘質を帯びる土質となる。遺物はこの粗砂の中から弥生土器、須恵器、木片が出土した。

出土遺物 (第15・16図)

21は弥生土器の鉢形土器である。狭小な平底からやや内湾して立ち上がる。22は須恵器の环身。受部はやや上向きに外方へ延びる。たちあがりは内傾し、端部内側は棱をなす。底部外面は回転ヘラケズリ調整が施される。23～28は木片。23は自然木と考えられるが、上方に加工痕を看取。樹種はウツギ属。24は棒状の削材で樹種はアスナロ。25は板状木片。樹種はモミ属。26は杭。先端部に加工痕(削り)を看取。樹種はスダジイ。27は芯持ち材で先端部に加工痕を看取。約1/2程度、樹皮が残る。樹種はコナラ属コナラ亜属クヌギ節。28は芯持ち材。杭として使用されたと考えられる。先端部、枝部に加工痕が残る。樹種はヒサカキ。

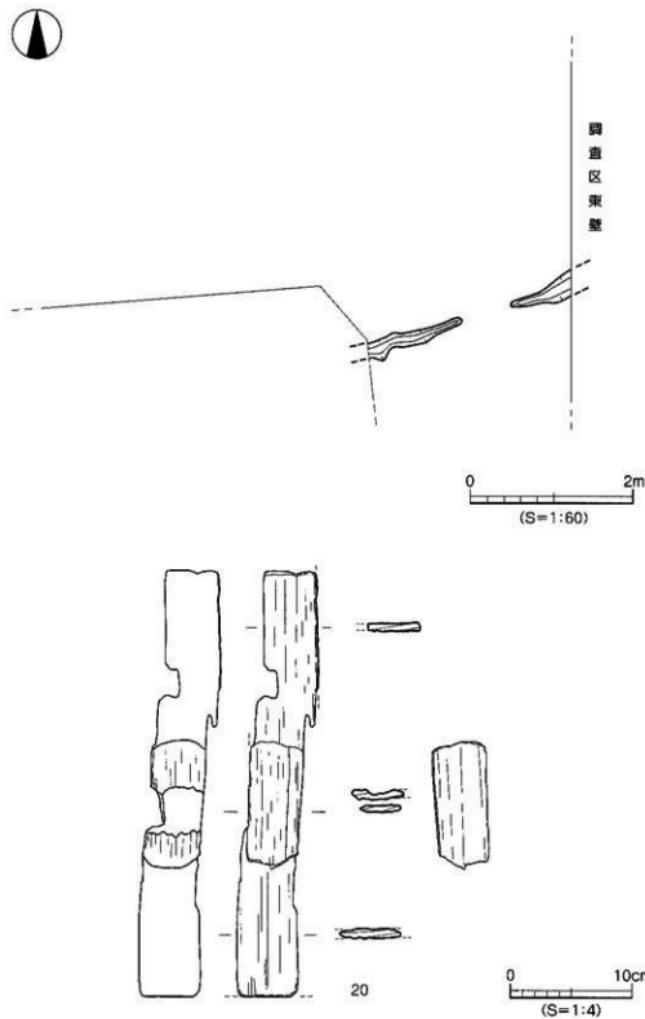
時期 出土遺物は占墳時代後期と考える。

トレンチ内出土遺物 (第17図)

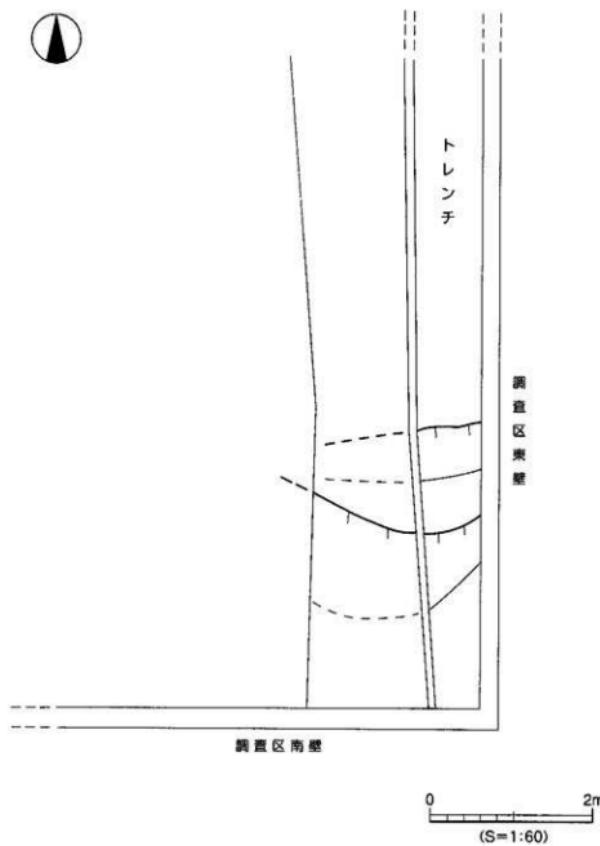
29・30は調査区北東側のトレンチ内(第VII-b上面)から出土した。29は変形土器の底部片で上げ底を呈する。30は薪と考えられ、表面に焦げ跡が残る。樹種はコウヤマキ。

採集遺物 (第18～21図)

31～88は第III層(客土)中から採集した遺物である。31～33は変形土器の口縁部片である。31の口縁部は短く外反し、端面はやや肥厚される。32は「く」の字状をなす口頭部片。口縁部の外面はやや厚く仕上げられる。内外面共にハケ目調整痕が残る。34は鉢形土器。外面には多くの煤が付着する。口縁部端はやや拡張され、中央部は僅かに凹む。35～47は底部片。35～38、40は上げ底を呈する。39の外面にはタタキ痕が残る。45～47の外面には指頭圧痕が残る。48～58は変形土器の口縁部片。50～53の頭部には斜格子目突部、刻み目突部が貼付される。54～58は複合口縁壺の拡張部片。54・56の拡張部外面には波状文が施される。55は、やや下垂する拡張部外面に円形浮文が貼付される。58の拡張部外面は横ナデにより段をなす。59～67は底部片。62の体部は僅かに段をなし、底部から立ち上がる。外面にタタキ痕を看取。64・67の外面には指頭圧痕が残る。68～72は高壺の壺柱部片。73～77は支脚。73・76は中実で、器高が低く円柱状を呈する。74・75は中

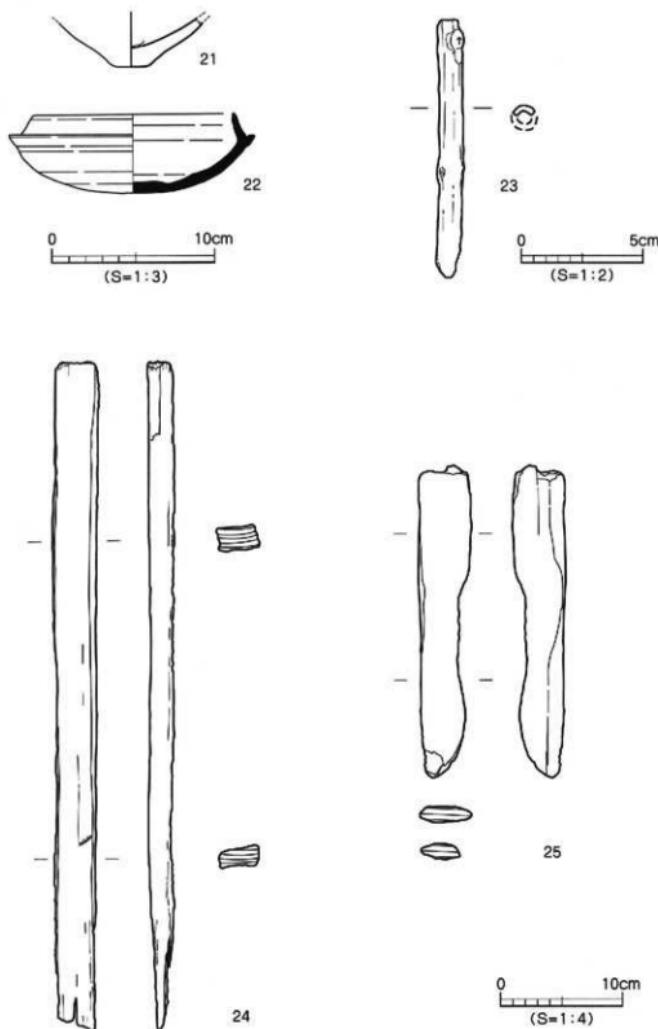


第13図 SD3測量図・出土遺物実測図

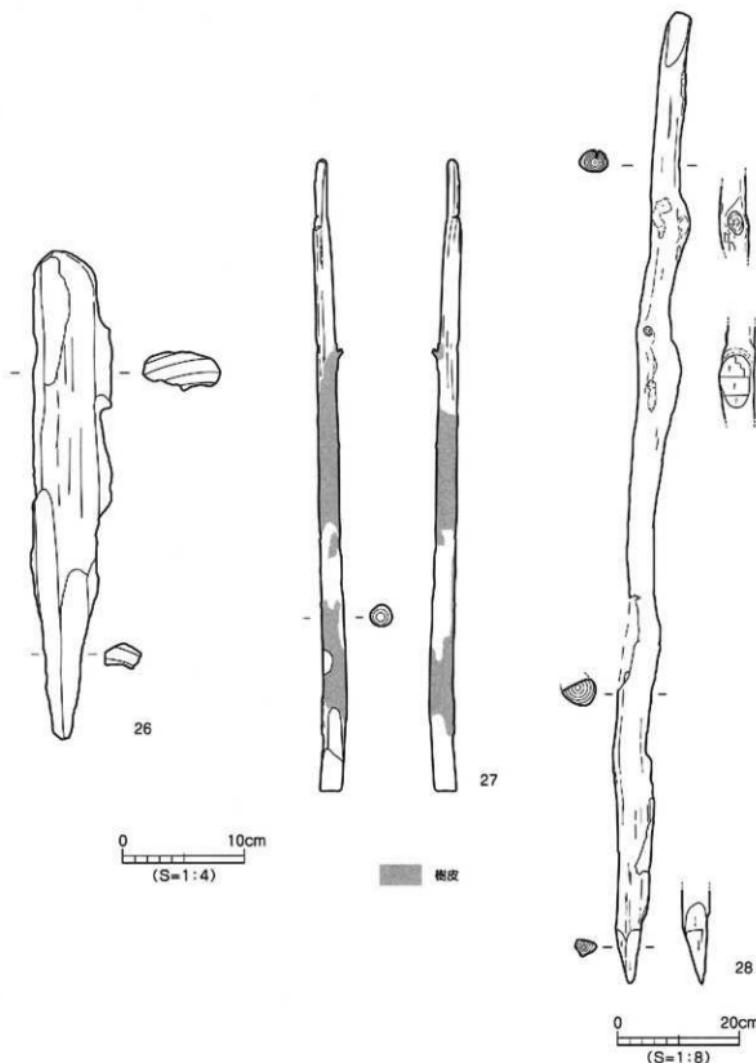


第 14 図 SD4 測量図

空を呈し、外面にタタキ痕が顯著に残る。77 は突起部片。78 は瓶の把手。79 は瓶の底部。80 は須恵器の坏部片。81 は小型の壺形土器。短く立ち上がる拡張部外面にハケ目痕を看取。82 は羽釜の受部片。83～85 は陶磁器片。85 は合子。86 は器種不明。外面に格子叩きが施される。87 は碧玉製の管玉。約 1/3 の残存で重さは 0.345 g を量る。88 は残存約 1/2 の陶石製砥石。四面に使用痕を看取。重さは 76.98 g を量る。



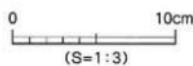
第15図 SD4出土遺物実測図(1)



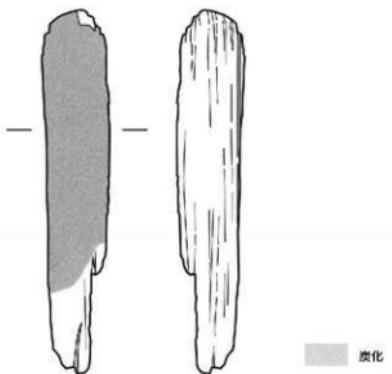
第 16 図 SD4 出土遺物実測図 (2)



29



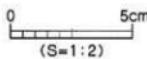
(S=1:3)



炭化

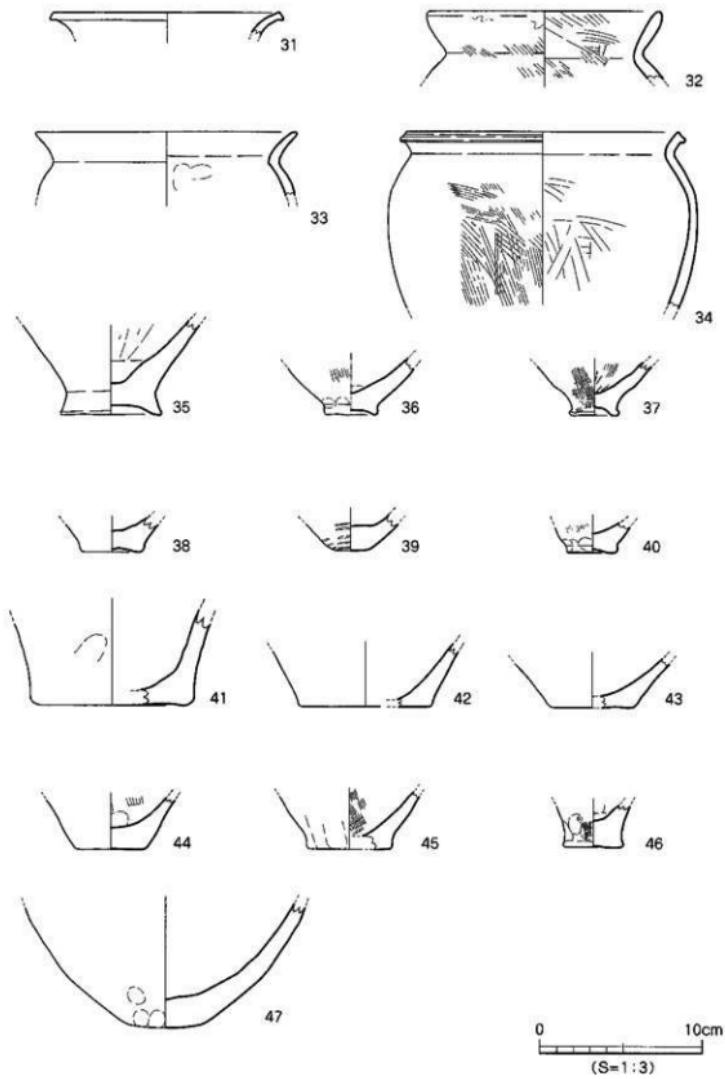


30

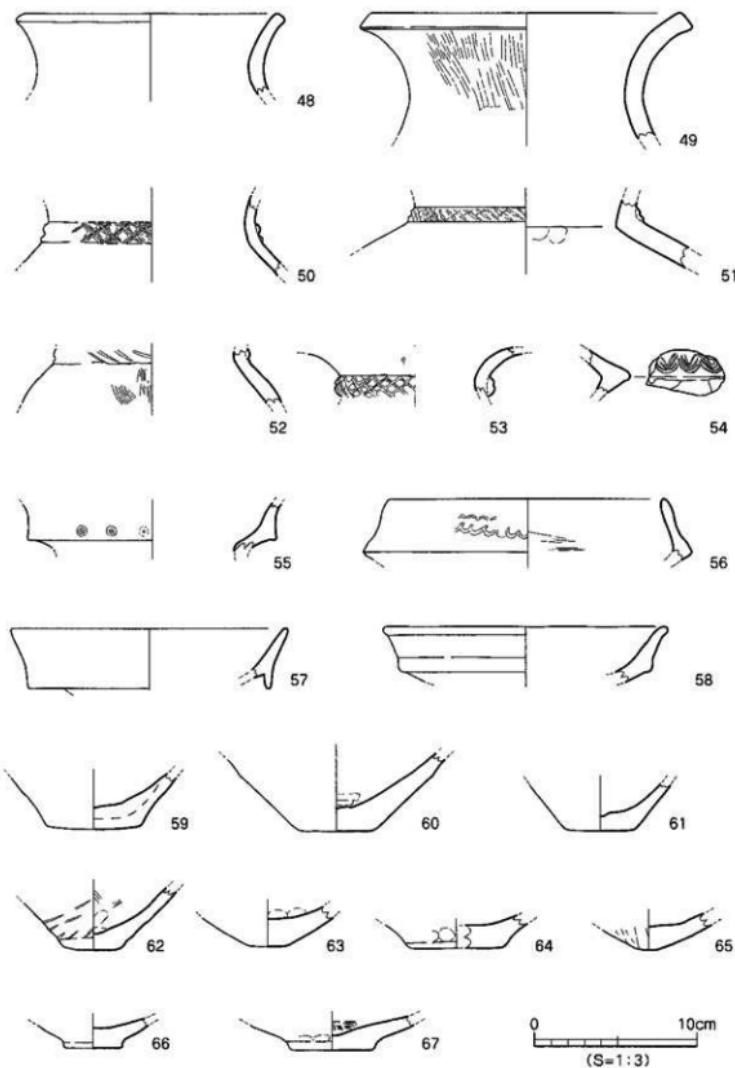


(S=1:2)

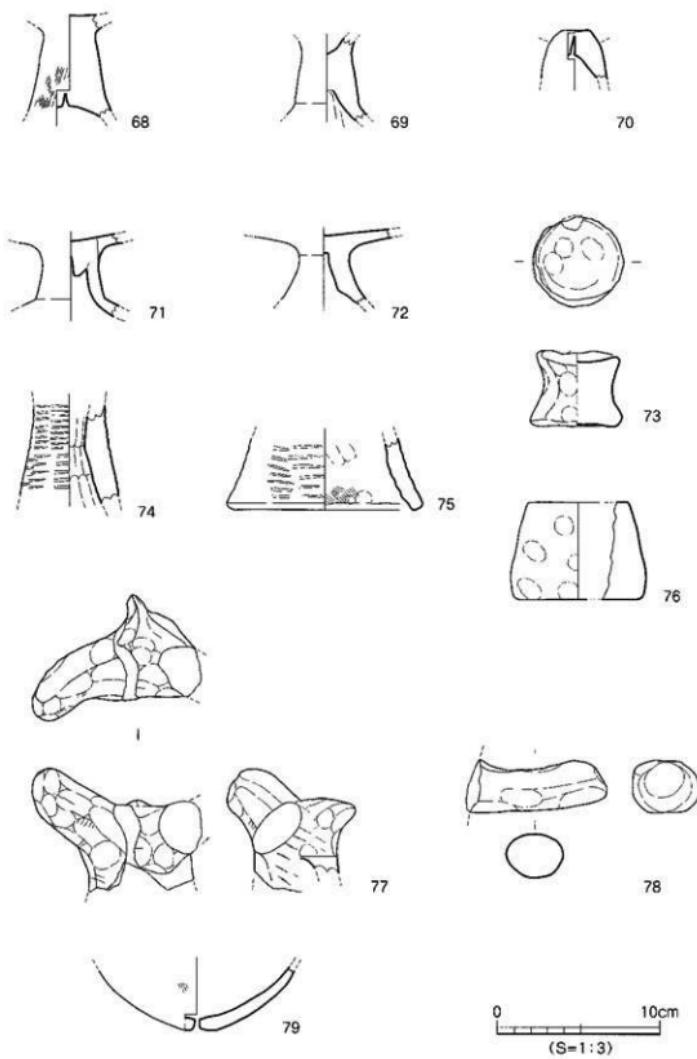
第17図 トレンチ出土遺物実測図



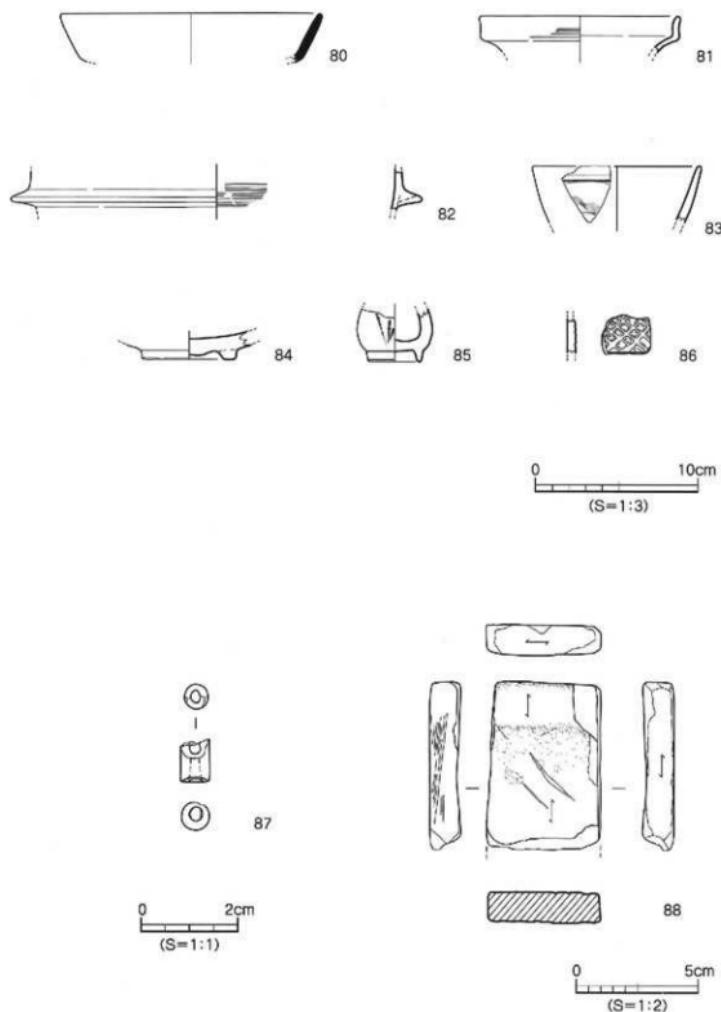
第18図 採集遺物実測図(1)



第19図 採集遺物実測図(2)



第20図 採集遺物実測図(3)



第 21 図 採集遺物実測図 (4)

第3章 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

古川遺跡は、小野川と内川に挟まれた、標高約15.5mの沖積低地に位置する。第4次調査では、弥生時代後期の自然流路と溝や古墳時代後期の溝が検出されている。今回の分析調査では、自然流路や溝から出土した木製品や自然木を対象として、古植生や木材利用に関する情報を得ることを目的として、樹種同定を実施する。

1. 試料

試料は、木製品や自然木10点(試料番号1~10)である。

2. 分析方法

剃刀の刃を用いて木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール(抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートを作製する。生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)を参考にする。

3. 結果

樹種同定結果を表1に示す。木材は、針葉樹5分類群(モミ属・コウヤマキ・ヒノキ・アスナロ・ヒノキ科)と広葉樹5分類群(コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属アカガシ亜属・スダジイ・ヒサカキ・ウツギ属)に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・モミ属(*Abies*) マツ科

軸方向組織は仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。柔細胞壁は粗く、垂直壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔はスギ型で1分野に1-4個。放射組織は単列、1-20細胞高。

表1. 樹種同定結果

番号	遺構	層位	時期	器種	木取り	樹種	報告書番号
1	SD 2		弥生後期	板状	板目?	ヒノキ科	19
2	SD 3		弥生後期	板材	板目	ヒノキ	20
3	SD 4		古墳後期	杭	分割材	スダジイ	26
4	SD 4		古墳後期	棒状削材?	分割材	アスナロ	24
5	SD 4		古墳後期	自然木	破片	ウツギ属	23
6	SD 4		古墳後期	自然木	芯持丸木	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	27
7	SD 4		古墳後期	板状	板目	モミ属	25
8	SD 4		古墳後期	杭	芯持丸木	ヒサカキ	28
9	SR 1	上層	弥生後期	棒状	芯持丸木	コナラ属アカガシ亜属	3
10	トレンチ			木片	板目	コウヤマキ	30

- ・コウヤマキ (*Sciadopitys verticillata* (Thunb.) Sieb. et Zucc.) コウヤマキ科コウヤマキ属
軸方向組織は仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は窓状となり、通常1分野に1個。放射組織は単列、1-5細胞高。
- ・ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属
軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1-3個。放射組織は単列、1-10細胞高。
- ・アスナロ (*Thujaopsis dolabrata* Sieb. et Zucc.) ヒノキ科アスナロ属
軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、内壁には茶褐色の樹脂が顕著に認められる。分野壁孔はヒノキ型で、1分野に1-4個。放射組織は単列、1-10細胞高。
- ・ヒノキ科 (*Cupressaceae*)
軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1-10細胞高。
- ・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Cerris*) ブナ科
環孔材で、孔圈部は1-4列、孔圈外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高のものと複合放射組織がある。
- ・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科
放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では梢円形、単独で放射方向に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高のものと複合放射組織がある。
- ・スダジイ (*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii* (Makino) Nakai) ブナ科シイ属
環孔性放射孔材で、道管は接線方向に1-2個幅で放射方向に配列する。孔圈部は3-4列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高。
- ・ヒサカキ (*Eurya japonica* Thunberg) ツバキ科ヒサカキ属
散孔材で管壁は薄く、横断面では多角形、単独または2-3個が複合して散在し、道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性、1-4細胞幅、1-40細胞高で、単列のものが多い。
- ・ウツギ属 (*Deutzia*) ユキノシタ科
散孔材で、管壁は薄く、横断面では多角形、ほぼ単独で散在する。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性、1-4細胞幅、40-100細胞高以上のものまである。放射組織には鞘細胞が認められる。

4. 考察

弥生時代後期の資料は、SD 2から出土した板状、板材、SR 1の棒状の3点がある。これらの木

取りは、資料写真・実測図から板状・板材が板目、棒状が直径約3cmの芯持丸木であることが窺える。樹種は、板状・板材は針葉樹が利用されており、板状がヒノキ科、板材がヒノキに同定された。ヒノキ科・ヒノキは、いずれも木理が通直で割裂性・耐水性が高く、分割加工が容易な材質を有することから、板状・板材として適材といえる。一方、棒状は、強度が高い材質を有する常緑広葉樹のアカガシ亜属に同定された。

愛媛県における弥生時代後期の資料では、古照遺跡で板材の同定が行われておらず、ヒノキが確認されている（株式会社古環境研究所、1996）。また、釜ノ口遺跡の板状を呈する木材がアカガシ亜属に同定されている（株式会社古環境研究所、1997）。矢田八反坪遺跡の板状を呈する用途不明木製品では、アカガシが多く、赤色顔料が塗布された1点のみがヒノキに同定されている（財團法人愛媛県埋蔵文化財調査センター、2000）。一方、棒状を呈する資料では、矢田八反坪遺跡の柄にアカガシやシイ、用途不明の棒状の資料にアカガシ、クヌギ、ツバキが確認されている（財團法人愛媛県埋蔵文化財調査センター、2000）。

古墳時代後期の資料6点は、全てSD4から出土したもので、杭、棒状割材、板状、自然木がある。板状は、針葉樹のモミ属に同定された。モミ属も木理が通直で割裂性が高く、板状の加工が容易であるが、保存性は低いとされる。棒状割材？は、断面が長方形で、広い面が板目となる角棒状を呈し、樹種は針葉樹のアスナロである。アスナロは、ヒノキに似て木理が通直で割裂性・耐水性が高い材質を有しており、分割加工に適材である。杭は2点あり、試料番号3が板目板状の分割材、試料番号8が枝を伐採した痕跡が残る芯持丸木である。樹種は、試料番号3がスダジイ、試料番号がヒサカキに同定された。いずれも常緑広葉樹で、比較的強度が高い材質を有する。スダジイとヒサカキは、暖温帶性常緑広葉樹（照葉樹林）の構成要素であり、現在でも本地域周辺に分布することから、当時も遺跡周辺に生育していたことが推定される。なお、杭材の木取りの違いは、当時得られた木材の径の違いなどを反映している可能性がある。自然木は、試料番号5が復元直径約1cmの破片、試料番号6が直径約2cmの芯持丸木である。樹種は、試料番号5がウツギ属、試料番号6がクヌギ節に同定された。いずれも落葉広葉樹で、河畔等に普通にみられる樹種であることから、周間に生育していたと推定される。ウツギ属は、大きな個体でも直径4～5cm程度の低木で、體が抜けて中空になるのが特徴であるが、出土した資料でも中空の状況が確認できる。一方、クヌギ節は、樹高20mを超える高木になる種類であることから、出土した資料は枝等に由来すると考えられる。

愛媛県における古墳時代中期～後期の資料をみると、船ヶ谷遺跡で板材あるいは板状とされる資料について樹種同定が行われており、針葉樹の複維管束亜属、ヒノキ科、コウヤマキ、広葉樹のクヌギ節、アカガシ亜属、シイ属、クヌギが確認されている（株式会社古環境研究所、2002）。また、矢田八反坪遺跡の板状を呈する用途不明木製品でも針葉樹のヒノキ、コウヤマキが確認されているが、いずれの資料にもモミ属は確認されていない。モミ属は、船ヶ谷遺跡の杭状とされる資料に1点確認された例が見られるのみであり（株式会社古環境研究所、1999）、今回の結果は当該期におけるモミ属の利用状況を考える上で貴重な資料である。

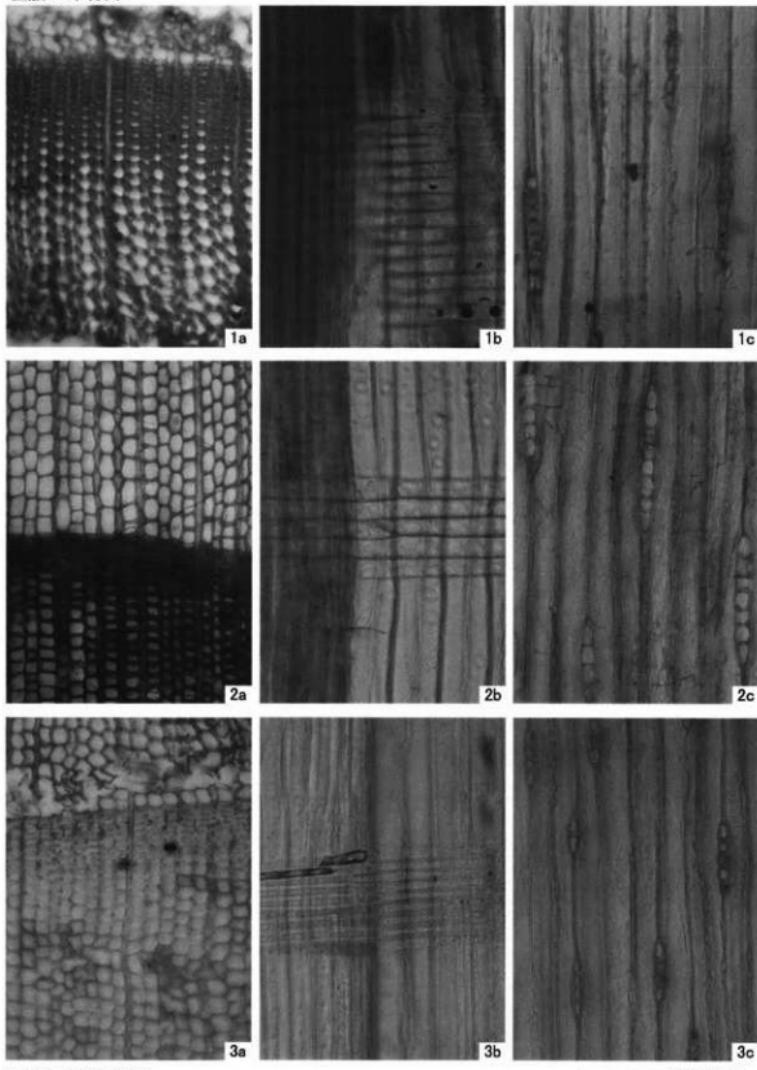
トレンチから出土した木片は、柱目板状を呈しており、何からの加工材と考えられるが、時期や用途は不明である。コウヤマキは、木理が通直で割裂性・耐水性が高く、分割加工に適した木材が利用されている。なお、愛媛県内でのコウヤマキの出土事例は、これまでに11例が知られている。古照遺跡の古墳前期とされる壠部材（山本、1974）、矢田八反坪遺跡の古墳時代中期～後期の用途不明

木製品（財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター、2000）、船ヶ谷遺跡の古墳時代中期～後期の板材、板状、杭2点（株式会社古環境研究所、2002）、葉佐池古墳の6世紀とされる木棺（光谷、2003）、桑原遺跡の弥生時代中期～古墳時代後期の木材や杭など3点（株式会社古環境研究所、2004、2005a）、久枝II遺跡の古代とされる木材（2005）であり、古墳時代の資料が多い。

〔引用文献〕

- 林 昭三、1991. 日本産木材 跡微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 伊東 隆夫、1995. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料. 31. 京都大学木質科学研究所. 81-181.
- 伊東 隆夫、1996. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料. 32. 京都大学木質科学研究所. 66-176.
- 伊東 隆夫、1997. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料. 33. 京都大学木質科学研究所. 83-201.
- 伊東 隆夫、1998. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料. 34. 京都大学木質科学研究所. 30-166.
- 伊東 隆夫、1999. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料. 35. 京都大学木質科学研究所. 47-216.
- 株式会社古環境研究所、1996. 樹種同定(1)・(2). 「古照遺跡－第8・9次調査－(第2分冊)」. 松山市文化財調査報告書第53集. 松山市教育委員会・財団法人生涯学習振興財團埋蔵文化財センター. 63-73.
- 株式会社古環境研究所、1997. 釜の口遺跡8次調査から出土した木材の樹種同定「釜ノ口I遺跡II－6・7・8次調査－」. 松山市文化財調査報告書第60集. 松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター. 174-180.
- 株式会社古環境研究所、1999. 船ヶ谷遺跡2次調査出土木材の樹種同定「船ヶ谷遺跡2次調査」. 松山市文化財調査報告書第70集. 松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター. 81-83.
- 株式会社古環境研究所、2002. 船ヶ谷遺跡4次調査における樹種同定「船ヶ谷遺跡4次調査 遺構・遺物編」. 松山市文化財調査報告書第88集. 松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター. 215-224.
- 株式会社古環境研究所、2004. 自然科学分析「桑原遺跡5次調査地」. 松山市文化財調査報告書第99集. 松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習財團埋蔵文化財センター. 49-57.
- 株式会社古環境研究所、2005a. 桑原遺跡4次調査4区における樹種同定「東本道跡6次調査地・桑原遺跡2次調査地・桑原遺跡4次調査地 松山市道中村桑原線閑連遺跡」. 松山市文化財調査報告書第105集. 松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター. 234-240.
- 株式会社古環境研究所、2005b. 久枝II遺跡における樹種同定(2001年度分析). 「久枝遺跡・久枝II遺跡・本郷I遺跡一般遺跡196号今治小松道路建設に伴う埋蔵文化財調査報告書第3集 自然科学分析・考察編」. 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター. 686-698.
- 光谷 拓実、2003. 木棺の樹種と年輪年代学的検討「葉佐池古墳」. 松山市文化財調査報告書第92集. 松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター. 178-179.
- Richter H. G., Grosser D., Heinz L. and Gasson P. E. (編), 2006. 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東 隆夫・藤井 智之・佐野 雄三・安部 久・内海 泰弘 (日本語版監修), 海青社. 70p. [Richter H. G., Grosser D., Heinz L. and Gasson P. E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 島地 謙・伊東 隆夫. 1982. 図説木材組織. 地球社. 176p.
- Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (編). 1998. 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東 隆夫・藤井 智之・佐伯 清 (日本語版監修), 海青社. 122p. [Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].
- 山本 四郎. 1974. 使用材とその植生. 「古照遺跡」. 松山市文化財調査報告書4集. 松山市教育委員会・古照遺跡調査本部. 72-74.
- 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター. 2000. 阿方遺跡 矢田八反坪遺跡 来島海峡大橋建設に伴う埋蔵文化財調査報告書第6集. 埋蔵文化財発掘調査報告書第84集. 448p.

図版1 木材(1)

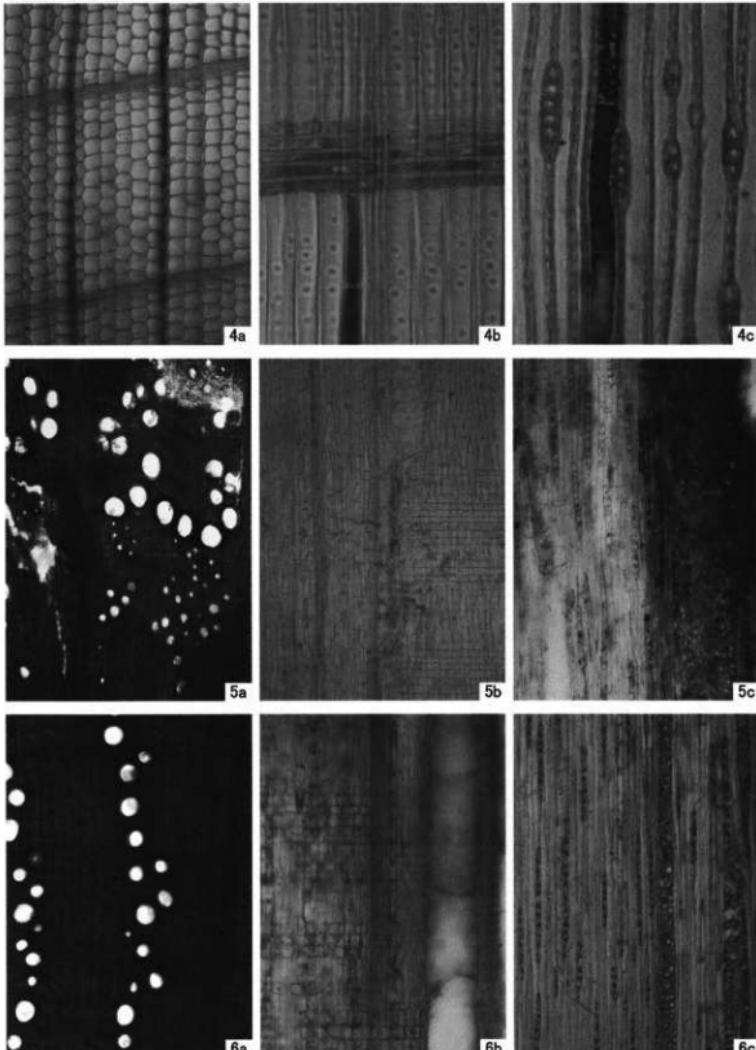


- 1.モミ属(試料番号7)
2.コウヤマキ(試料番号10)
3.ヒノキ(試料番号2)

a:木口, b:径目, c:板目

200 μ m.a
100 μ m.b,c

図版2 木材(2)



4.アヌナロ(試料番号4)

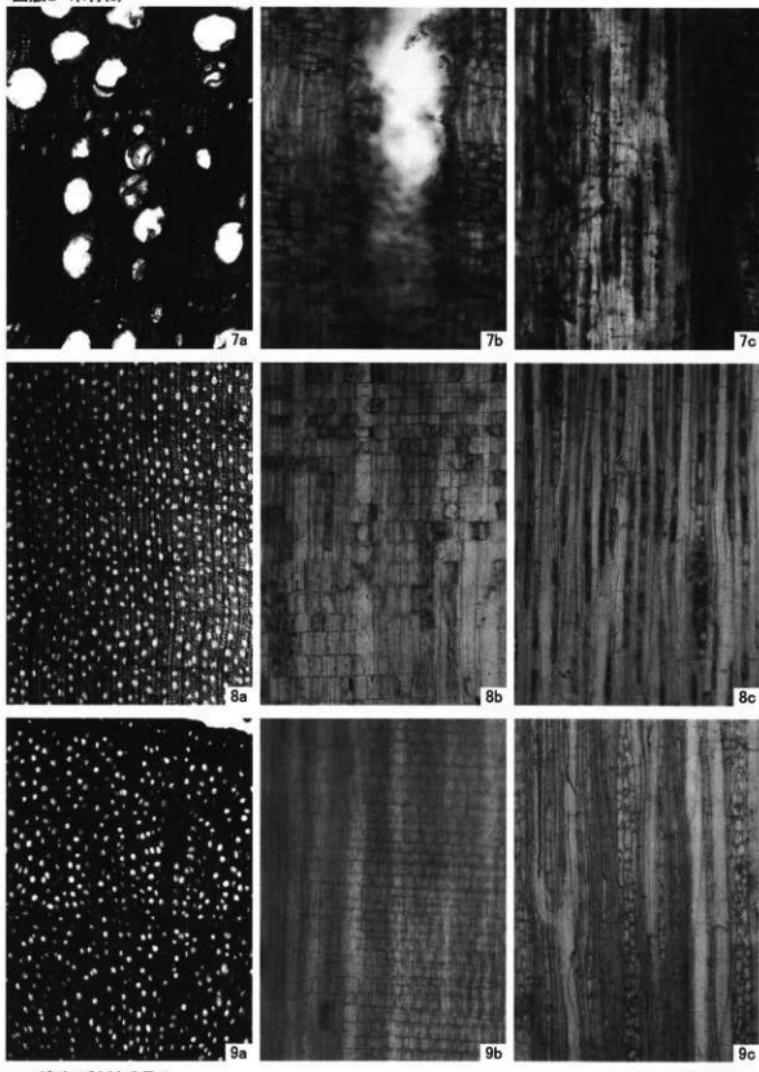
5.コナラ属コナラ亜属クヌギ節(試料番号6)

6.コナラ属アカガシ亜属(試料番号9)

a:木目, b:柾目, c:板目

— 300 μ m:5-6a
 — 200 μ m:4a,5-6b.c
 — 100 μ m:4b,c

図版3 木材(3)



7.スダジイ(試料番号3)
8.ヒサカリ(試料番号8)
9.ウツギ属(試料番号5)
a:木口, b:径目, c:板目

300 μ m
200 μ m

第4章 まとめ

今回の調査では、流水及び淀みによる土壤を確認した。調査地の東側に位置する西石井遺跡1次調査地と西側の古川遺跡1次調査地では黄色土が安定して堆積しており、上面で弥生時代から古代までの遺構、特に溝・河川が見つかっている。本調査地は二つの遺跡の間を北東から南西方向に流れる河川の影響を受けていると考えられる。なお東方50mに位置する古川遺跡3次調査では淀み或いは池の可能性が考えられる土壤や護岸施設に使用された可能性も考えられる木杭が検出されている。以下、遺構別に若干のまとめを記す。

調査では、弥生時代後期の自然流路1条（S R 1）、弥生時代後期の溝2条（S D 2・3）、古墳時代後期の溝1条（S D 4）を検出した。

S R 1 土層観察及び溝底の高低差から、水は北東から南西へ緩やかに流れていたものと思われる。出土遺物及び溝底に粘土層が堆積していることから弥生時代後期頃までは流れが弱くなっていたものと考えられる。

S D 2 北東から南西に掘削された溝で、溝下位に砂利層が堆積していることから一時期、流水があったものと考えられる。溝下位からは弥生時代後期の土器片が出土した。また、溝上位には黒色粘土層が溜まり、木片や植物の種子が出土している。種子は瓜系と桃系の二種類と考えられる。

S D 3 溝の中に溜まった土層と出土遺物がS D 2と似ていることから、同時期に存在したものと考えられる。

S D 4 出土品から古墳時代後期（6世紀後半）までは機能していたものと考えられる。また、溝底付近からは木片が検出され、一部加工材（木杭）も含まれる。

以上のことから、本調査地は集落域ではなく、生産域に近い様相を呈しているものと考えられる。なお、北東方に位置する東石井遺跡・西石井遺跡（1～3次調査）では弥生時代中期から中世にいたる石井地区の集落構造が明らかとなり、特に弥生時代では黄灰色土や暗灰色土、黄褐色土などの堆積層が集落形成に大きく影響していることが判明している。さらに「No.119 西石井遺物包含地」の内外を含めてこの地区における発掘調査事例が少ない要因にこれらの層位が関係している可能性が高いとの指摘もある（宮内 2006）。また、発掘調査中に市民の方から本調査地北側（北側道路部分）は、その昔、道って上がらなければ登れない程、高かったとのご教示も受けた。

今後の課題は、上記の指摘・ご教示を踏まえ、試掘・本格調査の更なる精度向上を計ると共に、弥生時代のみならず他の時代・時期の集落様相を解明し、遺跡の広がりを把握するための旧地形復元を行わなければならないと考える。

最後に、発掘調査及び報告書刊行にあたり、松山市保健福祉部子育て支援課、古川町内会の方々には多大なご理解、ご協力を賜り、記して感謝申し上げます。

宮内 慎一 2006「第8章 調査の成果と課題」『東石井遺跡・西石井遺跡－1・2・3次調査地－』

松山市教育委員会・財團法人松山市生涯学習振興財團蔵文化財センター

遺構・遺物一覧 - 凡例 -

(1) 以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

遺構一覧は武正良浩、遺物観察表は武正、多知川富美子、木下奈緒美が作成した。

(2) 遺物観察表の各掲載について。

法量欄 () : 復元推定値

形態・施文欄 土器の各部位名称を略記。

例) 口→口縁部、口端→口端部、口上→口縁上部、口下→口縁下部

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 微砂→微砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。() の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長(1~3) → 「1~3 mmの石英・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。○→良好、○→良、△→不良。

表2. 出土遺物観察表 土器品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎 燒	土 成	備考	図版
				外 面	内 面					
1	壺	残高 13.0	外傾して立ち上がる体部片。	ナデ	ケズリ→ナデ	灰黃色 灰黃色	石・長(1~4) ○			10
2	壺	口径 (9.7) 残高 5.7	外反気味に立ち上がる口縁部片。 頭部に沈澱を施す。	ハケ→ナデ	ナデ	灰黃色 灰黃色	石・長(1~3) 金 ○			10
4	壺	口径 (18.2) 残高 4.0	外傾して立ち上がる口縁部片。	マヌツ	マヌツ	にぶい橙色 灰黃色	長(1~4) ○			
5	壺	残高 2.4	口唇端面に刺み目。	ナデ	ナデ	灰白色 灰白色	石・長(1~2) ○			10
6	壺	口径 (21.2) 残高 2.8	円形浮文。	マヌツ	マヌツ	灰黃色 灰黃色	石・長(1~2) ○			10
7	壺	残高 3.7	複合口縁の屈折部外面に刺み目が施される。	ナデ	ナデ	浅黃色 浅黃色	石・長(1~2) ○			
8	壺	残高 5.0	やや外反して立ち上がる腹部片。	マヌツ	マヌツ	灰黃色 灰黃色	石・長(1~2) ○			
9	壺	口径 (12.6) 残高 2.9	LJ縁端面はナデにより拡張される。マヌツ	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黃橙色	石・長(1) ○			
10	鉢	口径 (26.6) 残高 9.0	LJ縁端部はやや拡張される。マヌツ	[口]ナデ ハケ(5本/cm)	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黃橙色	長(1~3) ○			10
11	鉢	口径 (23.0) 残高 5.8	短く外反する口縁部。	[口]ナデ ハケ(5本/cm)	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黃橙色	長(1) 金 ○	焼付着		10
12	鉢	口径 (14.8) 残高 4.1	短く外反する口縁部。 内側はやや肥厚される。	ナデ	[口端]ナデ ハケ	灰黃色 灰黃色	石・長(1) ○			
13	甕	底径 (7.0) 残高 2.5	平底。	マヌツ	マヌツ	灰黃褐色 灰黃褐色	石・長(1~2) ○			
14	甕	底径 3.0 残高 3.9	平底の底部片。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1~3) ○	黒漆		
15	鉢	底径 1.2 残高 2.8	体部は、狭小な平底から内凹して立ち上がる。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 黒色	長(1) ○			
16	甕	底径 (4.0) 残高 4.7	平底の底部片。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 橙色	石・長(1~2) ○			
17	高壙	残高 3.5	壙柱部片。	ナデ (指頭痕)		浅黃色 浅黃色	石・長(1~2) ○			
18	支脚	口径 (9.2) 残高 5.2	口唇端面に刺み目。	マヌツ	ナデ (破り痕・指痕)	青にぶい黄橙色 橙色	長(1) ○			10

遺物観察表

表2. 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調査		色調(外面 内面)	胎 燒	土 成	備考	図版
				外 面	内 面					
21	鉢	底径 残高 2.4 3.0	底部片。体部は内溝して立ち上がる。	ナデ	ナデ	灰褐色 灰褐色	長(1) ○			
22	壺	口径 底径 残高 12.3 3.1 4.9	受部はやや上向きに外方へ延びる。回転ナデ	[口]回転ナデ 回転ヘラ削り	灰 灰	長(1~4) ○			10	
29	壺	底径 残高 (2.8) 4.3	上げ底の底部片。	ナデ	ナデ(指頭痕)	灰黄色 灰黄色	石・長(1) ○			
31	壺	口径 残高 (14.3) 1.4	口唇端面はやや下方に抵張される。	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石・長(1) ○			
32	壺	口径 残高 (14.4) 4.2	内溝気味に立ち上がる口縁部片。	[口端]マメツ ハケ(5本/cm)	ハケ(5本/cm)	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石・長(1) ○			
33	壺	口径 残高 (16.0) 3.9	短く外反気味に立ち上がる口縁部。	マメツ	ナデ	浅黄褐色 黄灰色	長(1) ○			
34	鉢	口径 残高 (17.4) 10.9	口唇端面は下方に抵張される。	[口唇]ヨコナデ ハケ(5本/cm)	ナデ(工具痕)	灰色 灰色	石・長(1) 金 ○	煤付着		
35	壺	底径 残高 (6.2) 5.8	くびれて上げ底となる底部片。	マメツ	ケズリ→ナデ	明赤褐色 黒色	長(1~4) 多 ○			
36	壺	底径 残高 (3.2) 3.5	弱い上げ底を呈する。	[底]ナデ ハケ(7本/cm)	ナデ	明赤褐色 にぶい黄色	長(1~2) ○			
37	壺	底径 残高 (3.0) 3.3	上げ底の底部片。	ハケ(10本/cm) [底]ナデ	ハケ(8本/cm)	黒褐色 暗灰褐色	石・長(1~2) ○	黒斑		
38	壺	底径 残高 (3.4) 2.1	弱い上げ底を呈する。	マメツ [底]ナデ	マメツ	橙色 褐色	石・長(1~3) ○			
39	壺	底径 残高 2.0 2.2	狹小な平底。外間にタクキ痕。	タクキ [底]ナデ	マメツ	灰黄褐色 灰黄褐色	石・長(1~5) ○			
40	壺	底径 残高 3.1 1.8	弱い上げ底となる底部片。	ハケ(8本/cm)→ナデ (指頭痕)	ナデ	灰黄色 灰黄色	石・長(1~5) ○			
41	壺	底径 残高 (10.0) 5.8	平底の底部片。	ナデ	ナデ	明赤褐色 黒褐色	石・長(1~2) 金 ○			
42	壺	底径 残高 (8.2) 3.9	平底の底部片。	マメツ	マメツ	灰黄色 灰黄色	石・長(1~2) ○			
43	壺	底径 残高 (5.0) 3.0	平底の底部片。	マメツ [底]ナデ	マメツ	にぶい黄褐色 褐灰色	石・長(1~2) ○			
44	壺	底径 残高 (4.4) 3.2	平底の底部片。	ナデ	ハケ(5本/cm)→ナデ	灰黄色 灰黄色	石・長(1~2) 金 ○			
45	壺	底径 残高 (5.2) 3.6	平底の底部片。	マメツ	ハケ(8本/cm)	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石・長(1) ○			
46	壺	底径 残高 (3.7) 2.6	平底の底部片。	ハケ→ナデ(指頭痕) [底]ナデ(板状痕)	ナデ(指頭痕)	浅黄色 黑褐色	石・長(1) 金 ○	黒斑		
47	壺	底径 残高 (4.6) 7.6	平底の底部片。	ナデ(指頭痕)	マメツ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石・長(1~5) ○	黒斑		
48	壺	口径 残高 (16.4) 5.0	短く外反する口縁部片。	マメツ	マメツ	灰黄色 灰黄色	石・長(1~2) 金 ○			
49	壺	口径 残高 (20.3) 7.7	外反する口縁部片。	[口端]ヨコナデ ハケ(5本/cm)	ナデ	にぶい黄褐色 橙色	石・長(1~2) 金 ○			
50	壺	残高 5.1	斜格子目突帯貼付の頸部片。	[頸]ナデ マメツ	マメツ	にぶい黄褐色 灰白色	石・長(1~2) ○			
51	壺	残高 4.2	斜格子目突帯貼付の頸部片。	マメツ	ナデ	淡黄色 淡黄色	石・長(1~2) ○			
52	壺	残高 3.4	丸み目突帯貼付の頸部片。	ハケ(7本/cm)→ナデ	マメツ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石・長(1~3) ○			
53	壺	残高 3.0	斜格子目突帯貼付の頸部片。	ハケ→ナデ	マメツ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1) ○			

表2. 出土遺物観察表 土器

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面 (内面))	熟成度	備考	図版
				外 面	内 面				
54	壺	残高 2.6	複合口縁の折部外面上部に波状文が施される。	ナデ	ナデ	浅黄褐色 にぶい橙色	石・長(1~2) ○		
55	壺	残高 3.0	拡張部外面上に円形浮文。	ナデ	ナデ	にぶい黃褐色 橙色	石・長(1~2) 金 ○		
56	壺	口径(16.6) 残高 3.8	複合口縁拡張部外面上部に波状文が施される。	ナデ	ナデ	にぶい黃褐色 にぶい黃褐色	石・長(1) ○		
57	壺	口径(17.0) 残高 3.7	下方へ拡張される口縁部片。	マメツ	ナデ	にぶい黃褐色 にぶい黃褐色	石・長(1~2) 金 ○		
58	壺	口径(17.5) 残高 3.4	外傾する拡張部。	ナデ	ナデ	にぶい黄色 にぶい黄色	石・長(1) ○		
59	壺	底径(5.8) 残高 3.4	平底の底部片。	ナデ	ナデ	にぶい黃褐色 にぶい黃褐色	石・長(1~3) ○	黒斑	
60	壺	底径(4.4) 残高 4.8	平底の底片。	マメツ	ナデ(丁具痕)	灰青・黃灰色 灰青・黃灰色	石・長(1~4) ○	黒斑	
61	甕	底径(4.2) 残高 2.8	平底の底片。	マメツ	マメツ	橙色 にぶい黃褐色	石・長(1~2) ○		
62	甕	底径 3.7 残高 3.8	平底の底片。	タタキ 底 ナデ	ハケ(8本/cm) 底 ナデ	にぶい橙色 褐灰色	石・長(1~2) ○		
63	壺	底径(1.8) 残高 2.4	平底の底片。	ナデ	ナデ	黑色 灰青色	石・長(1~4) ○	黒斑	
64	壺	底径(5.8) 残高 2.0	平底の底片。	ナデ	マメツ	にぶい黃褐色 にぶい黃褐色	石・長(1) ○	黒斑	
65	壺	底径 1.0 残高 2.2	狹小な平底。	ケズリ→ナデ	ナデ	黒褐色 褐灰色	長(微砂粒) ○		
66	壺	底径(3.6) 残高 1.8	平底の底片。	ナデ	マメツ	淡黄色 灰青色	石・長(1~2) ○		
67	壺	底径(5.0) 残高 2.1	平底の底片。	ナデ(指頭痕)	ハケ	黑色 灰青色	石・長(1~4) ○		
68	高壺	残高 6.2	脚部片。	ハケ(10本/㎠)→ナデ	マメツ	灰青・灰白色 灰青・灰白色	石・長(1~2) ○		
69	高壺	残高 5.2	脚部片。	ナデ	ナデ	にぶい黃褐色 にぶい黃褐色	石・長(1~2) 金 ○		
70	高壺	残高 3.0	脚部片。	マメツ	ナデ	明褐色 橙色	石粒(1) ○		
71	高壺	残高 5.1	壺柱部片。	マメツ	ナデ	にぶい橙色 にぶい褐色	石・長(1~2) ○		
72	高壺	残高 4.6	壺柱部片。	ナデ	ナデ	浅黄褐色 浅黄褐色	石・長(1~5) ○		
73	支脚	底部径 5.1 基部高 4.6 底径 5.6	完形品。中実。	ナデ(指頭痕)	ナデ	にぶい橙色 にぶい褐色	石・長(1~4) ○		
74	支脚	残高 5.6	柱部片。	タタキ	ナデ(しはり板)	黄灰色 黄灰色	石・長(1~2) ○		
75	支脚	底径(12.0) 残高 4.4	壺部片。	タタキ	ハケ(8本/㎠)→ナデ	にぶい黃褐色 にぶい黃褐色	石・長(1) ○		
76	支脚	底部径(6.0) 底径(7.8) 基部高 6.0	外面上に指頭痕を有する。中実。	ナデ(指頭痕)	剥離	橙色 橙色	石・長(1~4) ○		
77	支脚	残高 7.6	角状突起 3ヶ所。2/3 残存。	ナデ(指頭痕)	ナデ(指頭痕)	灰黄褐色 灰黄褐色	石・長(1~5) ○		
78	瓶	残高 2.2	把手部。	ナデ(指頭痕)	ナデ(指頭痕)	にぶい黃褐色	石・長(1~5) ○		
79	瓶	底径 2.4 残高 3.9	焼成前穿孔	ハケ(8本/㎠)→ナデ	ナデ	橙色 にぶい黃褐色	石・長(1~3) ○		

遺物観察表

表2. 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	構 整		色調(外面) 内面	胎 土 成	備考	図版
				外 面	内 面				
80	环	口径(16.0) 残高 3.0	直線的に立ち上がる口縁部。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰白色 灰白色	密 ○		
81	盞	口径(12.4) 残高 2.2	拡張部は短く外反する。	ハケ	ナデ	にない黄褐色 にない黄褐色	右・長(1) ○		
82	羽釜	残高 2.5	水平な受部片。	[口]ヨコナデ ナデ	ハケ(10本/cm)	灰色 灰色	微砂粒 ○		
83	碗	口径(10.4) 残高 3.5	陶磁器片。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ オリーブ灰色 オリーブ灰色	オリーブ灰色 オリーブ灰色	密 ○	施釉	
84	碗	底径(5.8) 残高 2.2	陶磁器片。	回転ヨコナデ [底]削り	回転ヨコナデ	にない橙色 灰白色	密 ○	施釉	
85	合子	底径(3.3) 残高 3.2	染付。	[底]回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰白色 灰白色	密 ○	施釉	
86	不明	残高 2.1	格子タタキ痕。	ナデ	マツツ	にない黄褐色 にない黄褐色	石・長(1) ○		

表3. 出土遺物観察表 玉製品・石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
87	管玉	1/3	碧玉	0.88	0.6	径 0.6	0.345		10
88	砥石	1/2	陶石	6.9	4.7	120	76.98		10

表4. 出土遺物観察表 木材(木製品)

番号	器種	残存状態	樹種	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
3	棒状	欠損	コナラ属 アカガシ属	28.0	3.1	3.0	(3.0)	炭化	
19	板状	欠損	ヒノキ科	24.2	5.7	0.8			
20	板材	欠損	ヒノキ	34.6	5.0	0.8			
23	自然木	欠損	ウツギ属	10.6	1.1	0.2	(1.0)		
24	棒状削材	欠損	アスナロ	54.7	3.6	2.0			
25	板状	欠損	モミ属	25.6	4.3	1.3			
26	杭	欠損	スダジイ	40.0	6.5	3.6			
27	自然木	欠損	コナラ属コナラ更属 クスギ節	51.7	1.8	1.8	(1.8)		
28	杭	欠損	ヒサカキ	157.8	7.0	3.5	(4.6)		
30	薪	欠損	コウヤマキ	14.9	2.6	0.8		炭化	

写 真 図 版

古川遺跡 4 次調査

写真図版例言

1. 造構は、主な状況については、 4×5 判や 6×7 判の白黒ネガフィルム・カラリバーサルフィルムで撮影し、 35mm 判デジタルカメラで補足している。一部の撮影には高所作業車を使用した。

使用機材：

カメラ	トヨフィールド45A	レンズ	スーパー・アンギュロン	90mm他
	アサヒペンタックス67		ペンタックス67	55mm他
	ニコンニューFM2		ズームニッコール	28~85mm他
	キャノンパワーショットS2			
フィルム	白 黒 ネオパンSS・アクロス			

2. 遺物は、 4×5 判で撮影した。

使用機材：

カメラ	トヨビュ-45G
レンズ	ジンマーS 240mm F5.6他
ストロボ	コメット/C A32・C B2400
スタンド等	トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド101
フィルム	白 黒 ネオパンアクロス

3. 単色図版は、一部を除き、白黒プリントを等倍で使用できるように焼き付けている。

使用機材：

引伸器	ラッキー450MD・90MS
レンズ	エル・ニッコール135mm F5.6・50mm F2.8N
印画紙	イルフォードマルチグレードIV R Cペーパー

4. 製 版 写真図版175線

印 刷	オフセット印刷
用 紙	マットコート110kg

【参考】『埋文写真研究』vol.1~20『報告書制作ガイド』

〔大西朋子〕



1. 調査前風景（南西より）



2. 調査区南側客土除去状況（北より）



1. 調査区北側造構検出状況（北より）



2. SR 1 内遺物出土状況（北西より）



1. SR1 完成状況（北より）



2. SD2 完成状況（北東より）



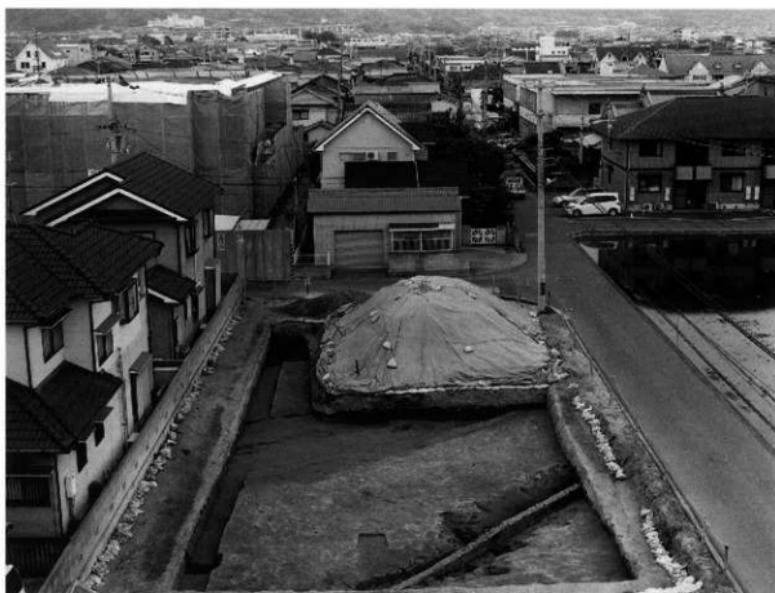
1. SD 4 内遺物出土状況（北西より）



2. SD 4 内遺物出土状況（北より）



1. SD 4 完掘状況（北西より）



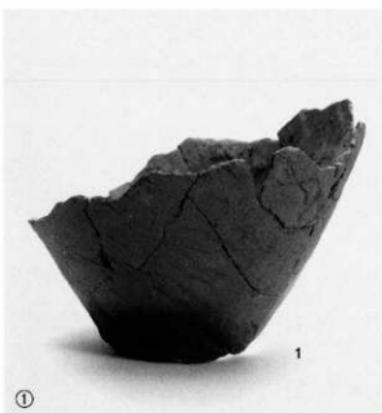
2. 調査区北側完掘状況（北より）



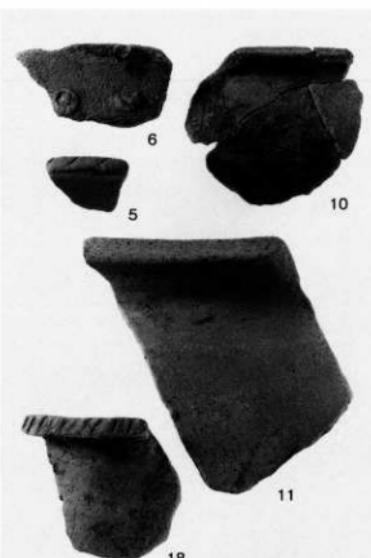
1. 現地説明会風景（北より）



2. 現在の状況（南西より）



①



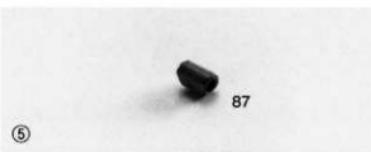
③

③ SD2出土遺物



②

①・② SR1出土遺物

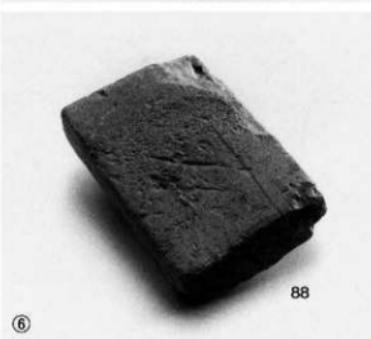


⑤



④

④ SD4出土遺物



⑥

⑤・⑥ 客土内採集遺物

遺構内出土（客土内採集）遺物



窖土內採集遺物

報 告 書 抄 錄

松山市文化財調査報告書 第146集

松山市保健センター南部分室・松山市南部児童センター整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

古川遺跡 —4次調査—

2010(平成22)年3月31日 発行

編集 松山市教育委員会
発行 〒790-0003 愛媛県松山市三番町6丁目6-1
TEL (089) 948-6605

財団法人 松山市生涯学習振興財團
埋蔵文化財センター
〒791-8032 愛媛県松山市南斎院町乙67-6
TEL (089) 923-6363

印刷 株式会社明朗社
〒791-2112 愛媛県伊予郡砥部町重光150番地1
TEL (089) 958-6868

